俳　句　雑　誌

水　明

２０２１　２月号

令和三年二月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十四巻第二号

《今月のかな女》

雪急に蒔き去る雲や梅白し

（句集『龍膽』）

長谷川かな女

梅見をしているかな女。折悪しく怪しい雲が上空に現れるや、瞬く間にはらはらと雪を降らせ、彼方へと去って行った。
かな女の好きな白梅に交じる雪の片。そして、一瞬のうちに消える雪片。観梅中のかな女の心を膨らませるひと時であった。
それにしても、あの雲は何だったのか。粋な若衆がちょっかいを出したような小憎い雲。
季重なりではあるが、それが詩情を増幅し、下五で作者の存在感を明示している。（鬼之介・註）

水　明

第1085号

―華の一句―

初しぐれアドレスを消しひと泣きす

杉浦理恵

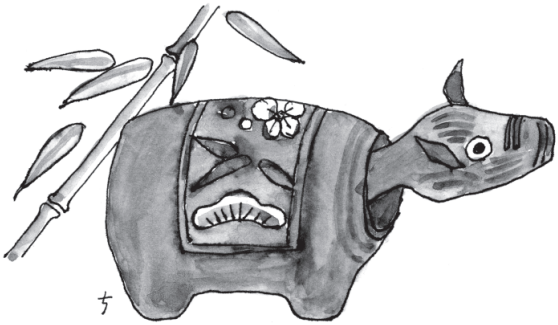
燃え盛っていた恋も、やがては冷めて破局の時を迎えた。熱愛した彼をきっぱり忘れ去ろうと、二人で撮った写真を全て破り捨て、贈られた品々も処分した。スマホの番号そしてアドレスにも、ついに消去の指が。きっぱりと心を決めたのに涙があふれ出て止まらない。外は無情の初時雨…。

（鬼之介・推薦）

水明

令和３年
２月号

華の一句 1
栄枯（作品） 山本鬼之介 4
眠たくて（近詠） 椎野美代子 6
早春（近詠） 田寺玲子 7
雪景 ※雪欄作家近詠鑑賞 町野広子 8
硯箱 ※季音月評 井口俊晴 10
季音「雪」（同人作品） 島津初花 田寺玲子 鈴木康世 ほか 12
季音「月」（同人作品） 鳥羽和風 井上燈女 大場順子 ほか 18
季音「花」（同人作品） 松井由紀子 梅澤佐江 河野はるみ ほか 23
鼓笛集（同人作品）・私の一句 68
現代俳句鑑賞 網野月を 28



錦上添花　石井喜恵　32
拈華微笑　大橋廸代　34
五つ星　菊池ひろこ　36
花いよよ　五明　昇　38
一竿風月　島津初花　40
即位披露　高島寛治　42
五　鳳　星野和葉　44
季の風物　松宮保人　46

「水明」年間作品回顧

水明集　保坂翔太　原田秀子　曲淵徹雄　ほか　48

水明集作品評　山本鬼之介　62
水　琴　窟（水明集十二月号鑑賞）　池田雅夫　66
俳誌望見　梅澤佐江　30
句集喝采　近藤徹平　71
水明の記事掲載他誌より転載　72
水明例会報・各地句会報　74・76
通信添削指導のご案内　81
春の吟行会のお知らせ　82
新珠賞作品募集　60
水明発展基金御礼・風声　83・84
後記　86

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

栄枯

山本鬼之介

着ぶくれ男児乗り込む女性専用車

冬の夜や隣家の門扉半開き

金屏風はこぶ見習ひホテルマン

盛衰のむかしが宿る冬座敷

日向ぼこ運命線が延びてをり

目障りなペアがうろつく冬の苑

荒行の火の粉の行方冬の月

明朝の眉唾物に冬の蠅

眠たくて

椎野　美代子

人肌の温みふふみし手編のセーター
お日様の笑つてるよなアンゴラセーター
モヘアセーター生きてゐるから眠たくて
彼のセーター点描となるまで送る
セーターの白に遊んでゐる日の斑
鹿の角壁にカウチンセーターの葉巻
ゴリラは毛布相身たがひて古セーター

箪笥をはみ出す色々な素材のセータに衣替えの度に往生している。近頃話題の断捨離には縁がない。身近に置く物々品々には其れなりの物語りがあるので。身に纏うセーターであれば尚のこと、娘時のセーターに配色を様々に変え幾度も編み替えたものもある。

これ等のセーターに袖を通すと金輪際戻りのない今日までの、いとおしい歳月に触れている思いがする。

早春

田寺玲子

地震跡を残せる渚鰆東風

春節の銅鑼打ち廻る中華街

霾や人工島の昼たける

春浅き旧居留地の煉瓦館

向き変へるフェリー余寒の風まとひ

冴返る野島断層そのままに

ミモザ咲く窓より流るアベマリア

「ルミナリエ」は阪神・淡路大震災の発生した平成七年から毎年十二月に開催している神戸の冬の風物詩です。昨年はコロナの影響で中止となりましたが、ルミナリエの鎮魂の光が途絶えることのないようにと、過去に制作を担当したイタリアの制作会社から、光の装飾作品の寄贈を受け、代替のイベントが居留地東遊園地で開催されました。

今年は、コロナ禍が収束し、例年通りのルミナリエが開催されるよう願っております。

雪景

◎季音雪欄作家近詠鑑賞　　町野広子

◇花木槿（十一月号）　山中みどり

唐突な訃報多かり白木槿

訃とは誠に唐突である。訃報が届いてから又、数年後に知る事もある。穏やかに天寿を全うが理想ではあるが、人生それぞれ。白木槿の白さが悲しい。

下町から祭消え失せ花木槿
有りの実や祭と言うものなべて無し
マスクして人の心を推し測る

世界中の誰も予測をしていなかったコロナウィルス。日常が大きく変化。三社祭を始めとして、日本中から祭と名の付く行事がなくなった。一句目の「消え失せ」二句目「なべて無し」共に作者の無念が伝わるも「有り」と「無し」で遊び心が伺える。三句目今や真夏にもマスクは当り前となっている。その現在を詠み、目と目で語り人の心の奥を推し測る。「目は口程に物を言う」目の泳ぐ人は信用出来ない。目が据って来ると危険。伏し目、流し目、悲しみ、喜び、怒り、弱気強気、やはり目は物を言う。

新米のどさりと届く佳き日かな

「どさり」が全てを言い得ている。新米の届いた喜び、研ぐ指のすべり、炊ける匂い、炊き上りの白さと食べた時の甘さは何物にも敵わない。佳き日である。

◇水都小春日（十一月号）　由良ゆら女

百合かもめ群れ舞ひ運河華となる
一列に鷗の気迫風に向く
船を出す漢の背に冬の雷

運河や港で見られるかもめ。実は渡り鳥なのである。人や船に慣れて、手に持った菓子等をかすめ取る芸を見せてくれる。小形の百合かもめが群れ舞い、辺りは賑やかになる。一方鴉程の大きさの鷗は、習性なのか皆同じ向きで一列になっている。風に向いて止まる鷗に気迫を感じた作者。その時々の姿を暖かい眼で眺めている。三句目、冬の海へ船を出す男の背中。命がけの仕事。家族の為人生を負うその背に、冬の雷が喝を入れる。

禅林の磨き込まれて干大根
かの件は和尚にたのむ神の留守

禅修行者の集まる所を林に例えた禅林。修業は厳しく寺のあらゆる場所が磨き込まれ黒光りしている。全てに於て無駄がなく、一日が刻まれたように過ぎる。寺の菜として干す大量の大根。黒と白の対比が美しい。二句目上五中七が軽妙な話し言葉で、スーと心に届き、和尚との気心の知れた関係も見えて来る。季語の斡旋が最高。

◇秋の七草（十二月号）　網野月を

山萩の名残とどめて日の溜まり
五弁なる桔梗の正義情を受く

秋の七草の中でも一般的で印象にある萩の花。草ではなく低木で大株となり、細い枝が風に揺れる様は美しく風情がある。盛りを過ぎた萩のその日溜りに散った花もいとおしい。二句目桔梗の花の五弁程きっぱりとした花は多くない。作者の言う正義そのものの感がある。白花もあるが紫が情を受くに更に相応しいと筆者は納得。

葛の花自縛の夢に嵐かな
フェンシングの剣の揺らぎや花芒

葛の太い蔓は樹木を登り地を這い際限なく広がる。豆の花に似た紫紅色の房状の花はほのかな香りがする。自らの蔓に絡まり身動きが取れない。自縛の夢から覚めたあと、心が嵐のように騒つく。フェンシングの細くて撓る剣と花芒の銀色鋭い茎や葉はフェンシングに通じる物がある。発想、気付き常にチャレンジ精神旺盛な作者である。

風なくてそは撫子のらしさかな

日本女性の美称「大和撫子」は今や死語とも思われるが、撫子は秋の七草の中で最も可憐な花。五弁で上端が深く細裂し淡紅色の小さな花が河原等で自生。風のない事がいかにも撫子らしいと、日本女性（妻）への称賛でもあろう。

◇不意に（十二月号）　石井喜恵

畦づたひ不意の高さに蜻蛉とぶ
水澄みて音なく亀のもぐりけり

畦道で蜻蛉（けいせき＝ばった）が人の気配に驚き飛び立った。普通に起りうる事ではあるが「不意の高さ」が絶妙。不意には高さでもあり、飛んだ事にも掛る。虫と人共に驚いた瞬間を捉えている。二句目鳴かない亀は行動にも音を立てない「水澄みて音なく」とあくまでも静寂が伝わる。二句共に秋を散策する作者が見えて来る。

萩真白風の縺れしひとところ
その事には触れず二人の夕花野
暮れ際を熾のごとくに初紅葉

どの花も白には人の心を清らかにする作用があるように思う。真白な萩の花。庭園であろうか。そこには萩を揺らす風がまつわりついている。二句目、人には触れたくない事の一つや二つはあるもの。経緯はどうであれ今は二人だけの世界。夕花野が美しく、誰も入り込めない。胸がキュンとしたのは遠い昔のこと。三句目、まるで一枚の絵を見ているような一句である。暮れ際、熾、初紅葉、どこを切り取っても絵になる。初紅葉の初初しさ、盛りの時の濃い色ではなく、淡い色が暮れ際のほの暗いなか、まるで熾火のようにポッと灯って見える。日本の四季日本人の情感は今更ながら素晴しい。

作者は永年水明の仕事を担われ、誠実で責任感があり、そのお人柄通りの御句に只只敬服。

硯箱

◆季音十二月　井口俊晴

朝寒やお前の尻尾温かろう　網野月を

毎朝寒くなってきた。布団から出るのが辛いなあ。起きる決心がなかなかつかない私の目の前を、雌猫のミーちゃんがのそのそ歩いて来る。腰をゆったりとくねらせ、尾っぽをゆらゆらさせている。人間なら熟女の年頃か、いかにも色っぽい。そんなミーちゃんを抱きしめ、鞭のようにしなう尾っぽを首に巻きつけたら、さぞかし温かくて気持ちがいいことだろう。うるさいって怒るかな、それとも抱きついてきたりして…。

渡り鳥失せし太古の海岸線　菊池ひろこ

渡り鳥の便りが列島各地から届く季節となった。遠くシベリアや中国から飛来するのも珍しくない。でも小さな体で、どうやって長距離を踏破するのだろう。専門書を読むと、鳥は体内コンパスで目指す方角を知り、あとは地理が分かる遺伝的プログラムの助けで飛ぶのだとか。何だかチンプンカンプンだ。作者もそんな疑問を感じたのだろう。だって何億年も昔にあった大陸の海岸線は、現在は浸食され、目印としては残っていないはずだ。渡り鳥はさぞ困っていることだろう。優しい作者の思いがあふれている。

朱の椀に新蕎麦を足す紺絣　大場順子

蕎麦好きにはたまらない新蕎麦の季節となった。行楽地の蕎麦処には何本もの幟が立ち、昼時には客でごった返す。膳に載せて「お待ちどうさま」と持って来られたのは、朱の塗椀に入った新蕎麦。美味そうな音を立てて蕎麦を啜るところへ、紺絣を着て襷がけの姐さんがお代わりを運んで来る。朱色と紺色、鮮やかな色の対比が、新蕎麦の美味さを演出していて楽しい。

ビンテージジーンズの少女通草裂け　内田恵子

ファッションの世界は不思議である。洋服は買ったばかりの新品がいいと思っているのは年寄り。流行に敏感な若者は、

ちょっと着古した感じがたまらないと言う。そう、ビンテージジーンズは最高だ。膝のところに穴が開いて、白い太腿や膝がちらりと見えるあれだ。値段は安い物でも新品の数倍はする。中には数十万円する物まで。今まさに自慢のジーンズをはいた少女が街を歩いて行く。熟して裂けたアケビの実のようなジーンズの膝小僧…。

湯上りの素つぴんでゐる月の夜　　町野広子

ちょっと熱めのお風呂から上がって、いつもの化粧水をつけず、縁側にぼおーっと座っている。ちょっと離れた部屋からテレビの音がかすかに聞こえてくる。ひんやりした夜気が火照った体に心地よい。そして、ガラス窓越しに見る月はまるで鏡のようだ。そう、化粧をすっかり落とし、すっぴんでいる私とお月さま。昼間の煩わしい人間関係を忘れ、自分でもびっくりするほど素直で心優しい自分がここにいる。

やや寒に手繋ぎ拒否の三才児　　藤澤喜久

「寒くなったねえ」。散歩に出たお祖母ちゃんが孫と手を繋ごうとしたら、三歳になったばかりのチビ助が、うるさがって手を振りほどこうとした。小さな手が冷たくなっているし、歩道だとは言え、自転車も行き交っているので心配。そんな年寄りの気持ちも知らずに、この子は嫌だと絶対拒否の姿勢だ。小さくても、いっぱしに自己主張をする。やれやれと思うが、それが何とも可愛く、頼もしく思える。

秋雨やポストに文の落つる音　　野口和子

朝からの雨、きのう友人に手紙を書いたので、傘をさして郵便ポストまで行った。雨は思いのほか降っていて、ポストはかなり濡れていた。宛名が読めなくなったら困るので、濡れないように気を付けて投函した。封筒がポストの底に落ちる幽かな音が聞こえた。その頼りなげな響きと雨の降る音が、何か寂しさを掻き立てるように感じられた。秋雨のシーズンが終わると、いよいよ冬がやって来る。

トンネルの合間あひまの山紅葉　　後藤綾子

電車が山あいの道を突き進んでいる。ついさっきまでは、民家や畑が次々と後ろに飛び去って行ったが、今はもう山また山、それ以外の景色はない。トンネルを抜けたかと思えば、またトンネル。トンネルの外は眩しいくらい真っ赤な紅葉で、日差しが余計に感じられる。トンネルの「合間あいま」という表現が列車のスピード感を表現している。

季音雪

初雪

島津初花

凩や軒端に桶のたが緩ぶ
男性に和傘の似合ふ初しぐれ
縄文の欠片を繋ぐ冬の月
冬将軍気構への無き夜明け
柚子風呂やこつんと当たる赤児の手

湯豆腐

鈴木康世

湯豆腐や兄(せ)なのはんなり京言葉
湯豆腐や夫婦で交はす二合半酒
小春日の富士寛ぎてゐたるかな
枇杷の花時に弱音の独り言
風伯の低き声聴くふぐと汁

冬館　田寺玲子

ジョンレノン座せし木の椅子月冴ゆる
冬薔薇のアーチくぐりて聖母像
海望む硝子戸多き冬館
冬凪や波立てずゆく貨物船
冬の月ＩＳＳの過りけり

銃口　永野史代

産声通る産院裏の花八ツ手
胸中に硝子崩るる音霜夜
独り居や霜夜の耳を聡くせむ
銃口の気配背に置く霜の夜
十二月八日限りなく美しき青空

冬日向　西山貴美子

冬うらら名代煎餅ひとつまみ
冬至てふ言の葉添へてチーズ切る
数へ日や駆込寺へ小半時
文弱の顔しらじらと冬の星
ハンドベルの音のまちまちクリスマス

冬障子　波多野寿子

冬ぬくし湧き水多き城下町
まつすぐな吾娘が好きですシクラメン
さびさびとひびく琴唄冬障子
友恋へば風に落葉の立ち上がる
裏道に水の音して冬の草

てんてこ舞ひ

星野和葉

朝刊二紙ずずずずずいと小六月
手帳二冊てんてこ舞ひの十二月
枯葉舞ふなか踊り子のやうに子ら
城跡の礎うもれ枯葉舞ふ
美術館へあの日と同じ枯葉道

しぐるる

茂木和子

ひとり酒くちびる乾く十二月
折鶴と赤鉛筆と冬机
幼な児を庇ふ腕や夕しぐれ
夕刊の筍差しに時雨くる
しぐるるや花の香立つ鉋屑

鈍色の海

矢作水尾

鈍色の海押してくる冬の暮
冬漁場加はる舟の競ひゆく
一湾に船旗の揃ふ大晦日
雲上に薄日の枯野奥武蔵
よく笑ふ女ばかりの掘炬燵

聖夜

山中みどり

コロナ禍のチャペルマスクの聖歌隊
クリスマスキャロル銀杯に血のワイン
樅となるスカイツリーやクリスマス
お台場にジングルベルの屋形船
大川の船足速き聖夜かな

年歩む　由良ゆら女

つきまとふ埃冬蚊と知れるまで
しばらくは舌と遊びて滑子かな
白刃の風に胸張る鴨の陣
天辺を競ひしは夢冬の鵙
行く年の嘆きなだめて鳶の笛

針治療　吉住光弥

雨あがる宝石の艶冬苺
ユニクロでセーター探す老しどろ
纏ひみる古セーターの歳月も
障子穴のぞきし景色われも老い
狂ひ花人の心に針治療

真人間　網野月を

生きるとはマスクに隠す穴三つ
数へ日の防災無線試験放送
親指はミカンの皮を外しけり
クリスマスキャロル歌へば真人間
罰が当たらぬ事が罰なり寒椿

たなごころ　石井喜恵

贅沢な一汁一菜今年米
新米を研ぐやはらかき掌
峡十戸固く門閉ず霜夜かな
千年を照らす法灯霜の夜
雑踏の駅に人待つ冬の暮

年の夜　石山かつ子

山祇の祠小さし冬木立
発砲注意の幟はためく冬木立
鷹の舞ふさみしくなればなほ高く
竹藪の笹のさやぎも年の夜
大三十日灯は耿々と薬師堂

弾痕　大橋廸代

クレーンの釣るは園丁城小春
手套ぬぎ塔の弾痕たしかむる
一念に冬かはせみの真一文字
悔すこし諫言あとの蕪蒸し
この橋で恋生まれけむ都鳥

しぐるる　大村節代

連れ立ちて上野浅草時雨来る
夕時雨まことしやかに占師
洒落本をこつそりひもとく時雨るる日
しぐるるや手足欲しがる不倒翁
小夜時雨この世に少し飽きて候

数へ日　栢尾さく子

爪立ちてみんなで覗く冬の滝
数へ日と云ふ恒例のガラス拭き
絶望名言きりなし冬の夜のラジオ
冬天に固まつて飛ぶ捨台詞
ポッペンを吹いて憂き身を忘れんと

十二月

菊池ひろこ

白マスク昭和の路面電車過ぐ
片手もてマスクなほす子ジャングルジム
赤が好き縞模様編む十二月
奈落より見るごと青き冬の空
冬芝と天との落差新病棟

湯気

五明昇

湯豆腐ぐらり核心を衝く艶話
湯豆腐の湯気に紛らす密事（みそかごと）
湯豆腐の湯気に収まる程の仲
短日をいなせに駈くる人力車
ゆくりなき余生の出逢ひ冬薔薇

武勇伝

境延昭

枯葎酒の仕業の武勇伝
冬の霧乗り継ぎ便を待つロビー
セーターの肩が涙を堪へてる
海鳴りが崖かけ登り冬苺
冬の薔薇ノイズのはしる夜想曲

都鳥

椎野美代子

百合鷗投網のさまに翔ちにけり
言問へば膝下に寄り来都鳥
眼の奥の熱くなるほど百合鷗
染め髪のむらさき泛ぶ都鳥
都鳥暗誦の歌こぼれ初む

季音月

賀　正　　鳥羽和風

参道を鳶の影行く初御空
鼻先に泡が一つ初湯かな
大輪を皿鉢に咲かす牡丹鍋
炭弾く昔気質の父であり
寒の水砦のごとく喉仏

虎落笛　　大場順子

セーターは星占ひの今日の色
セーター解くみるみる玉となる昭和
湯豆腐に起ちて踊れり花がつを
北斗の柄少し傾き虎落笛
奏づるは月の篁虎落笛

冬至粥　　井上燈女

百姓の名残の蔵や落葉垣
大利根の寒夕焼の尖りぐせ
幾度も重ね啼きせる冬の鵙
凸凹の薬缶たぎるや冬の月
冬至粥母息災の影曳きて

衒ふ　　小倉倭子

通院の石に躓く冬立つ日
寒木瓜やポキッと頸椎骨の音
降り注ぐ星の言の葉クリスマスイヴ
急かされて急かして歩く年の暮
熱燗や衒ふひとつの武勇伝

師走寄席　　丸山マスミ

もう一局と引き止めらるる霜夜かな
疫病封じの護摩の火高し十二月
紙切りの弁舌弾む師走寄席
カフカ説く初老教授の赤セーター
福耳に縁なき家系マスク買ふ

宇宙より　柚木治子

青竹の切口匂ふ十二月
電飾の大樹の悲鳴もがり笛
独奏の少女おとなぶポインセチア
枯菊や和紙の風情の威を正す
宇宙より還るカプセル霜柱

み熊野　十倉和子

山眠り厨子にしづもる朱唇仏
強しぐれ雲取り越えは命懸け
蜜柑供へ牛馬童子の旅灯す
星の綺羅かざし果無し山眠る
海鳴りに熊野三山眠れざる

柊の花　宇田白鷺

凩や真知子巻きする大こけし
苔生ゆる庭の柊匂ひ初む
「人道の港」眼下にみかんがり
黒々と冬嶺立ちたり北斗星
セーターを並べ若き日に沈む

冬至　藤澤喜久

冬至風呂子に還りゆく余命かな
太陽の衰へ吾も冬至粥
枯れ欅夜空の星の止り木に
数へ日や切羽詰つて寿命足す
故郷発つ夜汽車の窓の雪明り

返り花　高島寛治

山野の香微かに纏ふ冬苺
返り花今なほ残る旧街道
廃れ家の石垣繕ふ返り花
あるがまま生きて今あり焼芋食ぶ
負け犬の嘆きの如し虎落笛

冬休み　森田祥絵

アドバルーン短日の陽を引きおろし
裏庭に一と時の陽や花八つ手
三年日記生願ひつつ買ひにけり
年用意カレンダー持ちて庭師来る
校庭の空まで掃いて冬休み

漱石忌　山田美佐尾

頬杖をつきて思案の漱石忌
団子坂に文人多し漱石忌
聞き惚るる鈴鹿馬子唄冬の暮
一仕事終へて一服冬の暮
年の夜や祈りを込めて位牌拭く

置手紙　森川義子

金屏風背に金婚の盃交はす
うつすらと離島の見ゆる冬の海
廃船の怪しき影や冬の海
居留守して影の立ち去る冬の暮
数へ日の訃報を知らす置手紙

隙間風　霜中冬至

隙間風無住の庵の香を聞く
戸袋のある家に住み隙間風
村総出訥弁同士草枯るる
人並にマスクする児も大人めく
丁寧に冬至を生きて齢知る

年用意　原田想子

束の間の路地の日ざしや石蕗の花
白菜の少し乾きて日暮るる
己が手に作る野菜のおでんかな
あふれ出る柚子湯に柚子のためらへり
ひとつ終へひとつ忘るる年用意

初御空　加藤むら子

初神籤吉を願ひて摑みけり
同姓の多き集落懸大根
脱会を留められたる師走かな
枯山に向きて瞑想昼下り
暮早し塒へ帰る群鴉

冬至柚子　松宮保人

九頭竜の湖面を揺らす小春空
備長(びんちょう)を熾してをりぬ骨董屋
隔てなく猪鍋突く味噌の香よ
息災を冬至南瓜に委ねけり
冬至柚子あまた浮べてゐる境地

暮早し　荒井倶子

綿虫や鍬の乗せある猫車
通らせてもらふ私道や暮早し
短日や愚痴ひとつ捨て帰りゆく
冬霞ノッポのビルが宙に浮く
鉛色の海に溺れし冬の雷

六尺二寸　森本早苗

冬うらら観音様の髭伸びる
嵐山も斯くやと思ふ冬紅葉
六尺二寸トンビ似合ひの好々爺
冬帝へコロナ終焉願ひ上ぐ
ウイルスの足音高く年暮るる

冬木立　内田恵子

冬苺少女の顎の尖つて
牡蠣啜る少年小さき喉仏
空つぽなピエロの眼冬木立
冬薔薇お化け屋敷となる空家
うどんと卵おかかたつぷり霜の夜

赤子のグー　町野広子

花八ツ手赤子のグーはいつ開く
来世又姉妹で居たし花八ツ手
頬被外して土間で身を叩(はた)く
柴負うて斜面を下る頬被り
療養の長し霜夜の咳払ひ

似姿　渡辺舎人

ヘプバーンのルージュの歩幅赤コート
恥のなき「人生相談」漱石忌
腰掛に我慢の少年青写真
似姿の我らに聖痕なき聖夜
君と吾の息なり聖樹明滅す

挑戦状　池田雅夫

老の春新たに記(しる)す挑戦状
髭を剃り身形(みなり)を正し御慶かな
念仏の如く七草諳誦す
戦の手に粗塩の仕打ちかな
寒燈下拡大鏡を頼りとし

冬の虹　伊藤敦子

祝ぎの日の瑞兆大き冬の虹
食べ初めの膳にも蛸や冬うらら
紅葉映ゆももかの大役つとめあぐ
木守柿夕日に映えて火の如し
夫の忌の冬雲動くこともなし

冬帝　井関礼子

冬帝に召され俳聖逝き給ふ
冬帝の慈悲の眼差あまねけり
寒晴のこよなき空を賜りぬ
柊の花や門口ほのとして
高僧の密の揮毫や年詰まる

雪催　川崎道子

絶叫の路上ライブに木の葉雨
銀杏散る株価いつとき上昇す
落葉道厚底靴の紐を締め
置炬燵通販雑誌読みちらす
訛ある車内放送雪催

湯豆腐　岡野順子

湯豆腐やいま組まれゆく鉄筋の
工事場の人の動きや湯豆腐よ
湯豆腐のあくまで白き肌晒す
湯豆腐をふうふう吹きて平和なり
ずしんずしんと音のなかなる湯豆腐よ

☆　☆

季音花

冬木立

松井由紀子

枝先に鋼の光冬木立
穏やかな地熱ありけり冬木立
山姥と露見しさうな大嚏
ぐい呑みに赤絵とり出す十二月
仕舞湯へ間合ひの長き除夜の鐘

賑ははし

河野はるみ

金屏風の前で受賞の賑ははし
枯園にナイトを気取り屋敷林
名無し草そこだけ赤し冬の庭
枯園の水面に墨絵現るる
新しく半紙求めて年用意

大つごもり

梅澤佐江

霜月や加賀友禅の裾さばき
暇乞ひせり口紅滲むマスク捨つ
枯園に金色の陽の最終章
ひととせの想ひを胸に晦日蕎麦
待ち人や大つごもりの灯をともす

マスク

井口俊晴

マカロンの紅色甘く冬のばら
マスクまで黒に揃へて網タイツ
これ幸いマスクの下の不精髭
底なしの飲み屋のおかみ酉の市
縁側の破れ障子に日の名残

冬銀河

大塚茂子

国境も領海も無き冬銀河
狼を捜す兜太よ冬銀河
除夜の鐘秩父盆地に吸込まれ
みぞれ降りワイパー忙しビル歪む
輪島朝市三日続きの霙ふる

陽をさそふ　井上玲子

陽をさそひ松の根方に実千両
千両や庭の光陰軽からず
深々としづむ秩父嶺冬落暉
枕屏風旅寝にとどく波の音
屏風絵の逆立つ怒涛身に迫る

澱と燠　正木萬蝶

湯豆腐やゆれて崩れて余生なほ
湯豆腐や向き合ふ夫と別のひと
冬薔薇やワインの澱と胸の燠
マスクにも極立つ夫の鼻梁かな
男湯にひびく亭主の大嘘

五玉算盤　野口和子

魚屋の五玉算盤年暮るる
綿入れは亡父の大島紬かな
寝屋に来る犬の足音霜の朝
集会所声行き交ひて大掃除
蝋梅や集合住宅廃屋に

実千両　宮﨑チアキ

大樹の影に過去今未来十二月
色紙に一句わが名詠み込み十二月
裏庭をひとへに映やす実千両
風呂吹や食欲そそる朱塗椀
仄かなるスカイブルーや冬の雲

肋　近藤徹平

冬日差す肋をさらす武甲山
初霜や始発に急ぐ野良の径
故郷の陽と香を浮かべ冬至風呂
義士会や手に継ぎはぎの江戸の地図
張扇が武者震ひする師走寄席

十二月　下川光子

東京の旧き橋恋ひ都鳥
欄干に離れて一羽ゆりかもめ
二代目のかかりつけ医やお茶の花
窓越しの三毛猫眠る漱石忌
街路樹にまぎるる星や十二月

聖夜

野平美紗子

聖夜劇吾子は博士の黒衣装
雪催朝市の婆早仕舞ひ
トンネルを出ればがらりと雪催
冬木立白き半月引つ掛けて
子の列に紳士も並ぶ鯛焼屋

アンコール

熊倉千重子

明日へと誘ふ落暉暮早し
踏み踏めば里の音して霜柱
アンコールの拍手は止まずポインセチア
三度目の波に自粛の十二月
部屋ごとに千両活くる若女将

冬の月

田中章嘉

真夜中のコンビニの灯に冬の月
来客の途絶えし店や冬の月
夜回りの路地から路地へ冬の月
泥酔の声が響くよ冬の月
終電を逃し思案す冬の月

茶の花

石田慶子

黒マスク似合ふあなたの伊達眼鏡
切れ長の目元に黒子マスク映ゆ
手袋の右だけ二枚小引出し
茶の花や若き跡継ぎ異邦人
焼芋あちちスキップのポニーテール

鳩時計

福田千春

霜夜零時ぎこちなく鳴く鳩時計
霜の夜の軋む木の音郷の家
味噌煮込みに七味あかあか霜夜かな
マスクせる夫の物言ひ遠く聞く
眉引くは久しマスクの顔きりり

柚子湯

中野彊

白椿落ちて咲きしと気付きけり
ポインセチアの朱を一面に花の店
柚子湯してほのかなる香に若返る
シクラメン朝日を糧に色深む
冬コートシャンパン色を選びけり

枯葉

上戸千津子

世相にて密を避けたか枯木立
冬帝の仕業か今日の木々荒し
寒月に侍る光雲天女めく
廃屋に積もる枯葉も歴史あり
城跡に幾度の冬か下り松

冬の山

飛永鼓

喝采のあとは静けき冬の山
冬の山黙して広き父の胸
ピシピシと弾ける大根充実す
セーターのよなべと言ふは懐かしき
凩の夜は馴初めを語り合ふ

冬至る

菅原知子

冬紅葉妣の待針針山に
冬至湯にお隣りよりの柚子七つ
義母より伝授冬至の日のいとこ煮
クリスマス吾子は願ひをひらがなで
冬の陽や午後は「鬼滅の刃」読む

冬の月

後藤綾子

落しもの戻る師走の軽井沢
着膨れて犬の散歩の親子づれ
熱燗や忘我となれる夕ごころ
冬銀河歓喜の歌の大合唱
何時までも夢失はず冬の月

冬紅葉

西浦千枝子

袖通す児の顔うかべ編むセーター
家業継ぐ嫁の覚へしむかご飯
殉職の碑覆ふ冬紅葉
ゆうらりと生家の軒の柿簾
広原や冬の紅葉の幾何模様

息白し

宮崎紫水（雅訓改め）

底冷えの列真つ直ぐに登校す
北風や児童の列は小走りに
黄旗振り見送る保護者息白し
児童らを迎へる教師声冴ゆる
校門に風花今朝はちらちらと

聴診器　松山清子

開け放つ待合室の寒さかな
ポインセチア肌にやさしき聴診器
行火やめソックスはけと医師の指示
恒例の瀉血のベッド冷たかり
水鳥の動かざること我もまた

☆

☆

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2021年2月号

特集 みちのく俳人競詠
○詩歌・物語に見る東北　錦仁
○みちのく俳人競詠　小野寿子　吉田千嘉子　白濱一羊　照井翠　荻原都美子　小林万年青　柏原眠雨　高野ムツオ　阿部月山子　鈴木正子　高﨑公久　森川光郎
○エッセイ～福島の魅力　池田義弘
○いま、東北で詠むということ　浅川芳直

特別作品30句　茨木和生

〈グラビア〉俳句界NOW　武藤紀子

てにをは再入門～助詞の効かせ方
格助詞　大高翔　接続助詞　岸本尚毅
係助詞　佐藤郁良　副助詞　中岡毅雄
終助詞　加藤かな文　間投助詞　山西雅子
●自句自解～助詞の効かせ方
淵脇護　鳥居真里子　今井肖子　福田若之
※セレクション結社　「秋麗」藤田直子

私の一冊　横澤放川「森の座」

対談　佐高信の甘口でコンニチハ！
森達也（ドキュメンタリーディレクター）

別冊　投稿俳句界　一流選者14名！日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森
お求めは…●〒169-0075　東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188　URL http://www.bungak.com

現代俳句鑑賞

網野月を

冬がくればふゆがくればと鳴く小鳥　岩淵喜代子

（『俳句四季』12月号・冬がくればより）

上五の季語「冬が」の「が」が実体を浮き上がらせている。勿論、座五の「小鳥」が季語であり、「冬」は鳴き声を作者がそのように聞いたということであって、この句では季語の役割を果たしていない。が「小鳥」が示す秋とやがて来るだろう冬を招く鳴き声の構図が見事なのである。他に「悲しみの垂れさがりたる糸瓜かな」がある。

行く秋や道広ければゆつくりと　藤咲光正

（『俳句四季』12月号・ゆつくりとより）

中七座五の「道広ければゆつくりと」は仮定ではなくて、条件といった方がいいであろう。筆者はそう読ませていただいた。「ゆつくりと」は、倒置されているとすれば、上五の季語「行く秋」の「行く」を修飾する意味を有する副詞的表現と解釈できる。が掲句の場合は作者が「行く秋」を楽しみつつ「ゆつくり」歩んでいると読む方が順当であろう。

露の世のこころやからだ日に当てる　こしのゆみこ

（『俳壇』12月号・かなしく美しくより）

上五の季語「露の世」の表現を使用しているので、天文としての「露」というよりも「露の命」などと同様に生命の行く末の頼みがたい意味合いを表現しているのだろう。であるから、中七の「こころや……」が導き出されるのである。こころをどの様にして物理的に「日に当てる」のかは至難の業かも知れない。

月光に地図の折り目の膨らみぬ　北山　順

（『俳壇』12月号・月の客より）

作者は二〇二〇年の兜太現代俳句新人賞の受賞作家である。フェザーのような軽妙さがこの作者の作風のように思われる。「月光」が当たって「地図の折り目」が「膨ら」んだように見えたということなのだが、実際に「膨ら」んだりはしないのだ。景を作者の心象と受け取っても良いだろう。筆者なら「月の光」にしてしまうところだが。「月光に」として散文の様にすることで「膨ら」んだ様子を現実に近づけているように読める。

想念のような種蒔く少し老いて　若森京子

（『俳句界』12月号・白露踏むより）

作者は「少し老い」た自身を自覚したのである。それは

「想念のような種」を蒔いたからなのだ。「想念」には伝えることの多少のもどかしさとともに、月日によって止揚された作者の信念もまた含まれている。「種」を想念と把握したところに熟練を感じる。他に「七十五年目われ潮枯れの背泳ぎす」がある。

木枯しや竹屋を残す漁業基地　杉山昌平

（『俳句界』12月号・頸動脈より）

上五の季語「木枯し」の中に眼前の景を捉えている。「漁業基地」に隣接する「竹屋」に並んでいる青竹の青さが「木枯し」とシュールな対照を作り出している。取り合わせ句のうまみを上手く引き出しているのであるが、掲句は、一種の温かさというか、安心感を醸し出している。本来取り合わせ句の場合、取り合わせた事対事の緊張感もしくは、一体感を求めて表現するのであるが、「木枯し」と「漁業基地」以外に「竹屋」を配したところに新しい作法の技術があるように思われる。

鵙日和妻いて妻のなつかしく　松田ひろむ

（『俳句』12月号・マスク二〇二〇より）

「マスク二〇二〇」とあるので、感染症拡大に伴った日常生活の環境の変化が背景にあると考えられるが、もしそうでなくとも、退職などの理由から夫婦の日常生活に変化が生じることがあるだろう。そんな時に「妻」の存在感が「なつかしく」感じられたのである。「妻」との関係性は「夫」にとって当然夫婦なのであるが、その様態は夫々の夫婦に拠って異なるものだ。同一の夫婦でも「夫」にとっての「妻」との関係性と「妻」にとっての「夫」との関係性も全く異なっているものなのである。

上五の季語「鵙日和」は鋭い鵙の鳴声の引き締まるほどに澄んだ秋の大気を表現しているのであるから、掲句の夫婦の関係性は、一種純化されたものがあるように感じる。他に「妻留守の二十日ばかりを櫨紅葉」がある。

秋の水泥を舞はせて尾鰭ゆく　吉田千嘉子

（『俳句』12月号・逆光のより）

確実な眼力を感じさせる表現である。上五の季語「秋の水」の本意が十分に活かされてもいる。上五で一度切れが生じているので、上五の「秋の水」は時空間を指定しているのである。「泥を舞はせ」たのは「尾鰭」なのである。中七の「て」は「ながら」くらいに解すればよいであろう。

「密約さ」蝶の臓器の売買は　高岡修

（句集『凍港』より）

作者の句には何時もながら純金の冷やかさを筆者は感じる。気高くて近寄りがたさをも感じる。作者の人柄の優しさを思う時、作者は自分の毒素を句に込めて体から放出しているのではないだろうか？と想像する。作者の句を読み過ぎた筆者の体には放出された毒素が沈殿している。放射能より、ヒ素より、水銀よりも恐ろしい毒素である。他に「献体の凍蝶の胸ひらきおり」がある。

俳誌望見

梅澤佐江

『森の座』令和二年一〇月号　通巻四三号
主宰　横澤放川　発行所　東京都文京区

平成二九年四月、横澤放川が創刊。師系中村草田男。「中村草田男の文学精神の継承と発展を目的とする」を理念とする。（月刊）

主宰詠「混みあはず」一〇句より

重なりてゐて混みあはず曼珠沙華

赤く細い花びらを放射線を描くように咲く曼珠沙華、花の咲く頃には葉は無く茎は其々間合を保っている。「混みあはず」に群れず迎合せずという崇高な精神性を感じる。

野菊道民子の民の字が哀れ

野菊の咲く小径を歩く時、伊藤左千夫の「野菊の墓」の民子と可憐な野菊とが重なり、明治の封建制度に翻弄され早世した民子は哀れを誘い、晩年の政夫の独白のように胸を締めつけられる思いの作者。個が尊重される今だからこそ「限りある命を後悔なく生きる」大切さを共感する。

かかれるもかけしも淋し秋の蜘蛛

朝露を散りばめて白く光る蜘蛛の巣は美しいが、獲物のかかるのをじっと待つ間の孤独、獲物となってしまった物の捕食迄の間の恐怖、生きとし生けるものへの無常観。

だれだらう微笑んでゐる野菊道

野菊の化身か、はたまた民子の幻であったのだろうか。

山風も差矢さながら秋燕

吹き荒ぶ山嵐も物ともせずに、あたかも次々に射られた矢のように秋燕が飛び交っている。大海を越えて南方へ帰る日も近いのであろうか。そう思うと飛んでいる燕の姿には哀愁が漂う。

全句を通じ、森羅万象における自然の摂理、生と死、諸行無常まで哲学のような奥深さを感じる。

樹冠帯　自選　五名　各七句より　二名

存へて非才を悟る麦の秋　矢須恵由

新緑をつらぬく運河心透く　和田西方

光樹の譜　自選　六名　各七句より　二名

戴冠の名を負ふ疫病秋暑し　渡辺香根夫

かたく閉づ件の瞼ながし南風　小川雪魚

盛樹の歌　同人選　三五名　各七句より　三名

蝸牛羨しよ来し方常に光り　三浦美津子

夏至の日の妙にひやひやしてきたる　黒田咲子

天に一樹みみずしづかに生を継ぐ　小池厚子

壮樹の海　同人選　二〇名　各五句より　三名

決断のつかぬ廃業蟻地獄　中村百仙

梅雨深しかくし底ある船簞笥　田辺ゆかり

連翹すがやか捗りゆかぬテレワーク　沼田真知栖

花樹の道　主宰選　二五三名　各五句より　三名

鼻も口も塞がず通る青田道　山内ひろ子

明易く夫の気配の既に無く　板鼻弘子

茉莉花に父の逸話のあまたたび　柳澤和宏

より生活に根ざした描写により、人間の内面を象徴的に描き出し、その中に自らの心象を託しており、先師草田男の文学精神を髣髴とさせる。

令和２年

年　間　作　品　回　顧

期間

令和２年１月号
～令和２年12月号

錦上添花

石井喜恵

栢尾さく子

ふんぎりのつきて襖を締めにけり
裁ち物のチャコの曲線春の雪

日々逡巡することしきり。ふんぎりのつかぬ事など誰しも思い当る。開け放していたことも忘れていた襖を締める、というそれだけなのに決意を表す心象の鋭さを感じる。二句目、広げた布地に型紙に沿って裁断用の印を付ける。チャコにはピンク、紫、青など淡い色があり、その曲線は綺麗だ。春の雪の柔らかな感触を彷彿とさせる。

提灯の油紙の匂へる初不動
生れつ消えつ離りゆくなり秋の澪

五大明王の主尊である不動明王は、悪魔を降伏させる姿が不動であると云う。一月二十八日はその年の最初の縁日。多くの人出で賑うが、今年は自粛のため如何なることに……。

長谷川秋子の句に「砕けねば己れが見えず秋の浪」がある。作者にも同じような感覚があるのではと思った。

島津初花

春着きて交はす言葉の仰仰し
祝ひ日や海の香も盛る蒸鰈

正月に着るために新調した晴れ着。昂ぶる気持を押さえつつ口を衝いて出る言葉も何となくよそよそしい。俳諧味のある楽しい一句。福井県若狭にお住いの作者。若狭湾では定置網漁業が盛んで、特産の子持柳蒸鰈は最上品として珍重され、祝い日には欠かすことのできない逸品である。

杖置いて歩数を増やすたんぽぽ野
記念樹の一つ年取り椿の実

たんぽぽは春になると道端や土手などで見られるが、暖かい日射しの中の黄一色の野原は眩しいくらい美しい。試歩の足取りも軽く、心弾む思いである。二句目、「若狭実椿わが骨片も埋むべし」の秋子の詠んだ椿の樹ではと思い巡らす。追憶の一句であろうか。

小倉倭子

オリオンの真下で反り身露天風呂
肘を付く出窓の少女春の風邪

オリオン星座は二月上旬の夕暮れ時に見ることができる。

何と云っても一番寒い時季、澄んだ大気の中で思い切り手足を伸ばして、さぞかし気分壮快であったことでしょう。二句目での春の風邪、まさかその時の露天風呂で引いたのでは、と思ってしまった。

お忍びや枝垂桜に匿はれ
白衣脱ぎ女医の春服ひるがへる

お忍びとは身分の高い人がひそかに外出することとある。いわゆる世俗的な密会とは異なるということか。枝垂桜の下で会うとは、万葉の世の男女のような艶を感じた。

日頃、きりりと白衣を着て毅然としている女医さん。私服に着換えると、その素顔は若く美しかった。

森川義子

急坂にバスつんのめる紅葉狩
打つ釘の曲り苛立つ余寒かな

櫨や七竈などはいち早く紅葉し山肌を鮮やかに染める。その名所を訪ねることは季節の楽しみである。作者はかなり山奥まで行ったのであろう。その美しさは如何許りであったことか。釘を打つなど簡単なようだが、真っ直ぐ打ち込むのは案外難しい。苛立つ気持を「余寒」で確り表現している。

郭公や渡り切つたるかづら橋
草撓ふ重さをもてり赤とんぼ

祖谷渓にかかる蔓橋。揺れる足元の板目から遥か下に渓流を覗く。十数年前、雨の中傘を差して恐る恐る渡った事がある。私の歩くすぐ前を子どもを負ぶって、悠然と渡り行く若いお母さんの勇気に感動したのを鮮明に思い出した。

原田想子

龍神の燃やし給ふるダム紅葉
裏山の竹に添ひ寝の寒椿

堰堤の向こうに赤く色付いた樹林が見える。満々と水を湛えたダム湖に映して、その姿は神秘的に美しく思える。

竹林の所所から顔を出している紅い寒椿。無愛想に突っ立っている竹に添い寝をしているようだ。と捉えた作者の何とも艶めく諧謔味が楽しい。

初蝶の一途な動き吾も立てり
我は上妻は下枝松手入れ

今年初めて蝶に出会った。その嬉しさと同時に、弱弱しくもひたむきに舞い飛ぶ姿に、作者は一瞬はっとしたのだ。

庭木の中でも松の手入れは特に難しく、大方は庭師の親方が担当する。その作業をご夫婦で上枝と下枝との役割分担で仕上げる。その熟練の手捌き、何と立派と感じ入った。

拈華微笑

大橋廸代

椎野美代子

皮手袋脱がんとすればしがみつく
あづかりし革手袋の火薬臭
遺されし手袋の五指語りたる
香水のゲラン・エルメス家籠り
白桃すする今しばらくの純情
薄明の果樹園白桃もぐ母郷

高級な黒皮袋を想起、〈しがみつく〉〈火薬臭〉に思いも及ばぬドラマの展開を、〈語りたる〉に生前のやさしさと温もりを思い出しせつない。クレオパトラに始まった香水もコロナ禍では「ミツコ」も「夜間飛行」も出番なしでやるせない。桃を詠ませると右に出る者なしの作者。薄明の果樹園で白桃をもげば、たちまち少女時代にタイムスリップ。年間を通じて連作を実行される抜群の力量に脱帽。

永野史代

母の遺せし摺り鉢が待つ山椒の芽
女の業ふと思ひつつ紫蘇を揉む
白藤揺るるたびわが乳房ひやりとす
つまくれなゐを黄泉まで飛ばそ亡兄を追ひ
子の遊ぶ南無なむ数珠玉南無ずずこ

お母様ゆずりの擂鉢で香り高い季節の品々を作る。春から初夏にかけて忙しい中まめに働く主婦の鑑である。清少納言や紫式部も愛でた藤の花、地上すれすれまで下垂し藤波とよばれる藤房の揺れる見事さへ〈乳房ひやり〉は白藤と同化した作者の感性の冴えで物した秀句。子供の頃の遊び相手が兄二人だった私には痛いほどよく解る〈黄泉まで飛ばそ〉が心に沁む。独得のリズムが実に楽しく、遊びの中から育つ友情や信仰心は尊い。

網野月を

産声の御慶御慶と聞えけり
楽譜通りに弾かねばならぬ蝌蚪の群れ
片膝立てて銃口に挿すカーネーション
蚯蚓鳴く銃口からは声が出て
あなた色に染まる息子や衣被

譜面通りに弾けばやがて一大交響曲もみごとに弾けるに違いなし。「どうすればこんな格好良い俳句が書けるのだろうか。」と主宰を唸らせた華の一句。私は奈良のある田圃で不思議な現象に出合った。田圃の中で農家の爺さんが「ほら蚯蚓が鳴いているよ、嘘だと思うならここ掘ってみようか」そして音のする所を掘ったら確かに蚯蚓が出て来た。生々しい体験である〈新日本歳時記〉星野紗一記を読んで、銃口から声が出ても不思議ではない気がしてきた。手塩にかけた息子の変貌に詮方ない親の気持が如実に現れておもしろい。

荒井倶子

寒の明声光りだす庭雀
寒明の空に切り込む竹とんぼ
恋猫の行き交ふ路地の生ぐさし
母の忌や茶箱より出す絹袷
南溟より帰らざる父土用波

四月号巻頭句。一年中でもっとも寒い小寒から節分までの約三十日間の寒が明けてほっとした気持で〈空に切り込む竹とんぼ〉は勢いがあり壮快で小気味好い。寒明けにぴったりだ。私も茶箱を持って嫁入りしたが、和箪笥を開けたことのない親不孝を反省。〈南溟より帰らざる父〉多くの犠牲者のお蔭で今の平和のあることを忘れてはならぬ。今以て戦争許すまじの思いを肝に銘ずる。家族愛に満ちあふれ心あたたまる作品多産に拍手。

井上玲子

薄氷や丹の橋に寄る鯉の影
ぴしぴしと薄氷踏んで童心に
猫柳活けて水辺の風を呼ぶ
渓流の水照りに燦と猫柳
海鳴りや薄氷解けぬ潮溜り

薄氷を舐めて春の訪れを知る鯉、指でつついて毀してみたくなるうすらい、光の春を万物が待ちのぞんでいるのだ。まだ葉を出さぬ枝は紅色で、銀ねずみ色の絹毛の艶の猫柳は水際のひかりを集め、ぱっと明るくなる。巻頭を飾った五句はまぶしい。

月冴ゆる読経もれくる延暦寺
秋深し洪鐘わたる嵯峨野路

句柄大きく格調高い作品に感銘。

五つ星

菊池ひろこ

星野和葉

あの中の光る一つよ星月夜

その「一つ」は、和葉さんにしか見つけられない星である。我々は和葉さんを通して、その星に光二主宰を思う。「星」と言わず「一つ」と表現されたことに作者の想いを感じる。

ひととせを風に委せて冬至粥

小豆を入れたり、南瓜を入れていとこ煮にしたり、冬至粥を作りながら女性は一年を振り返る。今年はそれしかなかったのだと。季語「冬至粥」が読者に共感を与える。

楽日のやう風花舞ひて旅路果つ

もぞもぞと又もぞもぞと小鳥の巣

萍や人はいつまで手を繋ぐ

紙吹雪が舞うこともある舞台の喩えが生きている。巣の中で雛が動くのは自然だが、「もぞもぞと」とは言い得て妙である。水面に浮く萍は、どこまでが単体なのか。人間と引き比べての「いつまで手をつなぐ」との発想が新鮮である。

石山かつ子

夜叉となり仏となりて大焚火

大焚火の火は原始の感覚を取り戻させる。怖れであり、癒しであり、この句の「夜叉、仏」はまさにそれを指している。

紅絹ほのと見ゆる袖口風の盆

和服の袖口や裾の裏から見える紅絹は風情のあるものである。町の辻での踊りの中の年配の人の所作を思わせる。

畳屋の寺に来てゐる冬至かな

ちやんちやんこ雀にひたすら餌を撒いて

菊人形姫の裾より着せ始む

「寺」と「畳屋」の意外性。「畳替え」の匂いも感じられる。「雀」と「ひたすら」から、老いた人の日常と周辺が偲ばれる。「姫の裾」なる強烈な言葉は、観察眼の鋭さを思わせた。

矢作水尾

深きより地軸の軋み帰り花

物の本によれば、「地球が自転する時の地軸は傾いており、これが季節を生じさせる」という。本来春に咲く花が秋に咲く「帰り花」の現象には、「地軸の軋み」が伴うというのである。科学を文学にした手腕に脱帽。

消ゆるまで箒にもたれ春の虹

春先に庭箒を持ったまま空を見上げ、虹が出ていたことに気づいた作者。すでに消えかかっていたのか。「箒にもたれ」とそのままの描写が詩情を生んでいる。

ナプキンの尖る頂秋初め
天日のほかは動かず枯柳
組まれゆく踊櫓の縄匂ふ

テーブルにセットされたナプキンの尖った頂の触感や温度に秋初めを感じられたのか。枯柳の風景を動かないものと捕えた感覚、天日という措辞が趣きを添えている。踊り櫓が組まれていく過程を見たことはないが、「縄匂ふ」に惹かれる。

十倉和子

鳥声を聴き分けてゐる白障子

聴き分けているのは白障子の内にいる人物。その土地に住んでいる人ならではの勘である。季語「白障子」が利いている。

燕来と絵本の兎立ち上がる

今年も燕が来たという嬉しさの表現に絵本の中の兎を持ち出した発想が、ただの擬人化以上の効果を与えている。

ゴム長の我を侮る梅雨鴉
我もまた後手歩き梅雨鴉
雲いまだ鰯になれず秋暑し

ご自分自身と鴉の間にある関係を置いている一句目、鴉が歩く時の後手のような姿を詠んだ二句目、まだ現れない鰯雲を表現した三句目などに、俳句の諧謔性を感じる。

井口俊晴

小さき町小さき太鼓や盆踊り

作者の記憶の中の風景であろうか。「小さき」の繰り返しが、その町への想いを感じさせる。

棚田から案山子が見やる父母の家

人間の代りに案山子を置いたことで成功している句である。棚田のある風景は、その人にとって特別なものであろう。

春雪やか細き仮名が宙を舞ふ
マスクして行き交ふ犬の散歩かな
爽やかや一本松に雲一朶

書道も始められたそうで、仮名文字の喩えが生れた。愛犬家の作者。マスクして行き交ふのは人間である。一本松の上の一朶の雲に爽やかさをとらえた感性は見事である。

花いよよ

五明　昇

大橋廸代

安珍塚にいま乱声の花吹雪
僧兵の鬨にすつくと金毛虫
百僧の梵唄に湧くしろばんば

蛇身となった清姫に焼き殺された安珍の供養塚（道成寺）、一山蜂起して秀吉と対峙した根来寺、空海の伝えた真言声明（梵唄）が流れる高野山を舞台に、歴史や伝承の一場面を今に偲ばせる三句。「乱声の花吹雪」、「金毛虫（紋白毒蛾の幼虫）」、「しろばんば」の取り合わせが絶妙だ。

かつこ鳴く化粧地蔵に赤マスク
冬満月のしぶきを頬に投函す

高野山奥之院への途次にお化粧をすると願い事が叶うと伝わる化粧地蔵がある。アイシャドウばっちりの地蔵が赤マスクをしている様がほほえましい。高々と澄み渡る冬満月、その降るような月光を浴びてポストへ急ぐ作者が見える。

菊池ひろこ

春雪の宙も未来も無音なり
噴水と体内時計通ひ会ふ
言霊を聴く秋風の交差点

作者が生活の中で実感した不思議の世界に焦点を当てた心象的な三句。音もなく降る春の雪から四次元の時空世界を思惟し、噴水と響きあう自らの体内時計を認識する。言霊は神々や貴人の発する聖詞・賀詞の事だが、作者が秋風の中に聴いたのは万葉集のやまとうたの言の葉だろうか。

桜餅刀自に老舗の戸の重さ
アトリエを高所に置きて夏の海

桜餅は春の訪れを告げる一般的な和菓子だが、老舗の女将にとっては店の伝統の何と重いことか。夏の海を見下ろすこのアトリエの快適さはどうだ。「桜餅」と「戸の重さ」、「アトリエ」と「夏の海」の取り合わせが読者の心に響く。

石井喜恵

春近し小さき帆の立つオムライス
子の丈に合はせ膝折る春の虹
手袋にさよならの指仕舞ひけり

作者の句に漂うメルヘンの香りに酔う。子供用のオムライスに小さなヨットの帆が飾られて春の海への憧れを誘ってい

る。山の端に立つ春の虹を見せようと子の丈に合わせて膝を折る母の優しさ。再会の日を胸に刻んで、握手の温もりが残る指をそっと手袋に仕舞うときめきの夕暮れ……。

ゆるやかに固まるゼリー梅雨兆す
短夜のかちかちと振る修正ペン

一句目は冷蔵庫の中で「ゆるやか」に固まるゼリーに、何時とも無く入梅する季節の移ろいを重ねた句。二句目は短夜に気忙しく鳴る修正ペンの音を「かちかち」の擬音語で巧みに表現している。いずれも措辞の巧みさが光る佳句だ。

高島寛治

五才児が百歳気遣ふカルタ取り
春野行く踏んではならぬ草を避け
母子寮に陽を溜めて咲く冬椿

小さきもの、か弱きものに注がれる作者の優しい視線が捉えたワンショット。カルタ取りで百歳の年寄の取り札を気遣う五歳の子、小さき花をつけた草を避けて歩く春野の散策、母子寮のあえかな日溜りに咲く冬椿……、ともすれば見逃しがちな一コマを句材とする感性と表現力に脱帽する。

手の荒れし母を促す初湯かな
伏す母の傍に置きたる桃の籠

戦前戦後を生き抜いた女性の手は例外なく荒れていたが、その母にさり気なく初湯を勧める。病に伏す母の傍らに好物の桃の籠をそっと置く。かけがえのない母への思慕の念を巧まずに詠んだ二句は、読者に深く静かな感動を与える。

野口和子

伽羅蕗やインクの滲むレシピ帳
俎板に色を残して秋なすび
どんぶりのおつきりこみに雪催

蕗の茎を醤油、酒などで伽羅色（黒茶色）に煮詰めた伽羅蕗はインクの滲むレシピ帳がお似合い、「秋茄子は嫁に食わすな」のことわざもある旬の秋なすびは絶品だ。幅広の生麺を野菜とともに煮込んだ「おっきりこみ」とともに、埼玉北部の味覚を詠み、読む人に鬼石への憧憬を感じさせる。

抱卵の燕に魅入る家籠り
小包の隅に手作りマスクかな

ステイホームを余儀なくされた作者が、久々に軒下の巣に抱卵する燕の姿に魅入っている。遠方の家族に送る小包には手製のマスクを忍ばせた。新型コロナウイルスの感染拡大がもたらす生活の変化をさらりと詠んで好感が持てる。

一竿風月

島津初花

大村節代

白酒や父の遺愛の夜光杯
宿酔に薄味うれし蜆汁

寒さも和らぎ春光も射し、雛祭の宵のこと、白酒を好まれた亡父を偲ぶ娘が居る。特に愛用の夜光杯は手の届くガラス棚にあって、洒落たお父上の面影に一献。それから一杯が重なりとうとう宿酔に到った。酔い覚めの蜆汁で体調が整った。

春の野の夜叉か天女か迷ひ子か
つばくらめ遠くから見る大仏殿
山笑ふ電気自転車充電中

広大な春の野に立てば、一瞬に天女か夜叉に変身し花野へ迷い込んでしまった。更に将又つばめになり切ったのは作者自身ではなかろうか。
自転車の充電が終ったら、句材を探しにサイクリングに出掛ける快活な節代さんが目に浮かぶようである。

五明　昇

屈まりて漁る艶本春浅し
蜆舟むかし栄華の十三湊

作者の句の八割は旅の句と伺い、ここで揚げた句は、信州生れの作者が、地元に腰を下ろし、古き良きに思いを重ねられたと思う。外は未だ寒い。気楽な本を探して読もう。

咲き初めの白梅を守る冠木門
雨水の日夕刊にある仄湿り
上田縞の機音軽し山椒の芽

由緒ある旧家の古い梅の木の枝を支える冠木門は、今も立派に役目を果している。更に心に留った句は上田縞である。信濃の上田地方で織られていた紬で、縦糸と横糸の色を変えた丈夫な伝統織物と推察する。筆者が昔、義母から上田縞の布地の話を聞いた記憶があって何故か心に響いた。

鈴木康世

常に見る富士の在り処や夏燕
山百合や雲脱ぐ富士を指呼の間に
南アルプス背景にして青嶺濃し

青嶺の風比翼の鳥を飛びたたす
青嶺暮色金星きらと輝やけり

顔を上げれば富士山が在り、呼べばすぐに返ってくる様な近くにお住いの作者。羨ましい限りで、地方から関東へ旅行しても途中に富士山が見えたか如何かで話が始まります。

青嶺は夏の光と気温を、緑から青色に貯えて勢いを増す。二羽の鳥は翼を広げて飛び立つ。勇壮な姿を見逃さぬ作者。やがて日暮が訪れると、金星が輝き始める。静と動が交差する様は正に映像を見ている様である。

丸山マスミ

駅ピアノサンタも交り音紡ぐ

駅の待合いに、ピアノの音が聞える。テレビで観る光景がうかぶ。クリスマスソングが流れると年の瀬の近いことが身に迫ってくる。

高高と風が風追ふ初御空
名を知る川名知らぬ山の初景色
振袖を襷に預け弓始
弓なりの寒月天を射る勢

年が明けると先ず空を仰ぐことから始まる。日常変らぬ周りの景色も、空気も新鮮に感じる初景色なのである。

新年の行事に弓始。若い娘さんの振袖はしっかり襷に納めて精神統一。見ている者も髪の根締まり緊張する。新年にふさわしい一句である。

昼間の弓始めの光景が脳裏にあるところ、その夜寒天に弓なりの月を見た。月が鋭く天を射る光景に立ち竦む作者だ。

正木萬蝶

蝌蚪に手足ひとに思春期変声期
水神の手のひら広し蝌蚪生るる
蛙子や今は廃れし童唄
行宮を覆ふ吉野の花は葉に
あかときの地震やり過ごす朝寝かな

命を継ぎ生と死をくり返す生体に着目。水難、火災を防ぐ水の神さまの手の平と思われる水がめで生れた蝌蚪と田んぼで生れたものに差があるとしたら、その場所に相応しく生きて行くのだろうか。

吉野山の桜の観光は、まさに当り、外れがあり一と夜の嵐で花は葉に変貌して居た哀しい思い出がある。

夜明けの地震は尋常でないが作者はただ経過にまかせる他に術は無いと向き合っている。強張らぬ寛大な心根がすべての句の中に伺えた。

即位披露

高島寛治

西山貴美子

たとふれば藪柑子程の恋なりき
あるがままに生きて転んで酉の市
たそがれは産土色に実万両

水明の代表作家で長谷川かな女を知る数少ない方でもある作者。東京駒込の六義園のすぐ近くで生まれ育つ。総じて都会的センスに溢れた句が多い。一句目の藪柑子程の恋「いいね」と言いたくなる。二、三句目、人生は山あり谷ありだが、晩年を豊かに実万両、私も斯くありたい。

花菖蒲風に仕ふるかたちして
秋扇うしろに母のゐるやうな

一句目、何時の間にかご高齢となられた作者、時に体調を崩される事はあろうが、お気持は常に前向きでいらっしゃる。二句目、心象的で心情を素直に表現されている。

山中みどり

冬薔薇忘却てふ幸もあり
着流しの藍の匂ひや夏の果
焙じ茶の香り小春の人形町

作者は東京生まれの江戸っ子で、粋とペーソス漂う下町情緒豊かな描写を得意とされている。地域での人望も極めて厚く要職を歴任、和装の似合う円満なご人格で姉のような存在でもある。一句目、人は忘れる事も出来るから生きてゆけるのだ。二句目、着流しと藍の匂い、下町ならではの光景だ。三句目、人形町は下町風情を強く感じる街、焙じ茶の香りが小春の街に漂う。

聖五月不要不急と言はれても
捨てられぬものは己よ木守柿

一句目、コロナ禍のもと、不要不急の文字が世を駆け巡った。不要不急といっても人により事情は異なる。晴天の五月なのに。二句目、捨てられぬ己と木守柿の対比が旨い。

柚木治子

皇后の涙がきらり小春空

虚あれど姿勢くづさぬ梅一輪
春雨や寄りし娘の忘れ傘

作者は情の厚い心の持ち主。これがいつも句に滲みでる。一句目、先般の即位披露のパレード、作者も涙したであろう。二句目、老樹の梅、それでも一輪凛と咲いてくれた。三句目、雨の中を訪ねてきてくれた娘。傘を忘れたので届けてやろうかと迷う親心が句に滲む。

「一葉の」滋味ある筆よ白芙蓉
風鐸の音色澄み切る今朝の秋

一句目、薄幸だった一葉の生涯に白芙蓉が重なる。二句目作者の繊細な心情が句から伝わってくる。

松宮保人

後ろ手の男刈田に立ち尽くす
種案山子親爺の野良着着てをりぬ
父の日ややはり親爺は野良に居し

作者は今般月欄に昇格。地元大鳥羽の名士としてご活躍。郵便局長として功労。数年前に栄えある叙勲「瑞宝双光章」を受けられたと聞く。句は生活、自然、旅と巾広い。刈田に立つ後ろ手の男は誰であろうか。家族をこよなく愛し大切にする方とお見受けする。

展望は海と湖とや風光る
海寺の甍を染めし大夕焼

いずれの句も広大で美しい一枚の絵を見るようである。

近藤徹平

小春日や筒音しのび田原坂
無住寺の内陣の闇余寒なほ
大西日富士を見下ろす勉斗雲

作者は建設省在任中、在任後も様々な要職を歴任され、学究肌の方であると聞いている。今般水明賞受賞、季音作家として無限の可能性を秘めている方である。人間の深層心理に力強く迫り、方程式を解くが如く人の心の核心に近付く洞察力は敬嘆に値する。

紫の雲路たづねて大花野
虫時雨終電あとの車輌基地

一句目の紫の雲路とは、紫の雲棚引く極楽浄土の空のことか。二句目、人生経験豊かな作者、暗い車輌基地と虫時雨との情感を余すところなく醸し出している。

五　鳳

星野和葉

波多野寿子

幾面の琴立てかけて冬座敷
冬座敷古ぶ緞子の琴袋
正座して琴柱はづすや冬ぬくし

長い事、箏曲に携わってこられた作者、指導もされておられた様だ。物静かなお姿と物言いは、対する者に安らぎをも感じさせる。今は長野にお住まいでお会いする機会のないのが寂しい。コロナ禍で誰もが大変な時であるが、気を付けられて何時までもお元気でいらして下さい。

「生きすぎたね」と友と笑ふや秋深し
小説を拾ひ読みして夜の長し

笑って話せる内はまだまだ大丈夫。頼もしいと思う。以前読んだ本が、ひょんな所から出てきた。懐かしさでぺらぺらと捲る。その内読んだ当時の事なども思い出し夢中になってしまった。日の暮れは待っていてはくれない。

茂木和子

山茶花の垣根越しなる猫談義
冬麗に透く桃色の猫の耳

犬大好き人間の作者、犬談義なら分かるが猫談義とは。のら猫がいつも通るので垣根に猫道が出来たのだろう。猫の耳を日に透かすと桃色に見えるという話から、猫に散歩はいらない、味噌汁かけや削り節の猫飯の事まで付きない。

水甕の萍逃ぐる所なし
浮草や孵化のはじまる小宇宙
萍に烏羽色の脱皮あと

作者は、博士と言われるほど花の名、育て方に詳しい。又鳥の名も良くご存じだ。小宇宙に見立てた甕で孵化したものは何だろう。メダカかと思ったが、萍に烏羽色の脱皮とは何か、茂木博士に問い合せよう。

由良ゆら女

猫つ毛は母親ゆづり柳の芽
ソプラノにバスとテノール春の猫
わが声に恍惚として猫交る

タイトル「春の猫」の内の三句であるが、一句目は春の猫ではない。猫っ毛は人の毛であって、猫の毛の様に柔らかい頭髪である。この俳句を五句に組み入れた意気込みと、その

技はなかなかのものである。恋猫が己の声にうっとりとしていては、成就はむずかしいのでは。

敗荷や幾何の教師に片思ひ
止り木に無言の二人炉火恋し

好きな先生の教科の成績は良いのが一般的である。無残とも見える敗荷の姿を見て、むかし学んだ幾何学が脳裏をかすめた。その時の先生も思い出し、何となくもやもやしてきた。あの先生は今頃どうしているのだろうか。止り木の二人が無言とは、どういう事か。炉火恋しでは、もう冷えてしまったのかも知れない。

藤澤喜久

人の世は不要不急ぞかたつぶり
蚊帳吊草大人も独り遊びせり

コロナウイルスのために、不要不急の人は家に籠もれという。ならば家ごと出ればいい。かたつぶりが良く結び付いたものである。キャンピングカーが大分売れた様だ。行き着いた野原で蚊帳吊草を見つけた。昔取った杵柄で、遊び出したら童心に返りもう止められない。

下戸上戸幼馴染の祭笛
遠き日の母の笄土用干し
蚊帳の中秘密洩らしてしまひけり

産土の祭に久し振りに集まった面々、思い出話が尽きない。下戸も上戸も昔のままである。今流行りの断捨離では思い掛けないものが出てくる。母の笄は捨てるわけにはいかない。蚊帳は毎日吊るのが当り前であった。雷が鳴ると蚊帳の中へ、又、蛍を放したりして、何処か秘密めいたものであった。

梅澤佐江

春装は貝紫の恋ごころも
薫風にたちまち染まりゆく身体
めまとひを抜けて逢ひたき人にあふ

やわらかく、時にするどく淡々と愛、恋を詠む作者である。「貝紫」は、アクキガイ科の貝の分泌液から採取した紫色の染料とその色、春の恋ごろもには納得の色である。この衣で薫風に会えば、身心までも染まってしまう。その心を秘めて逢いたい人に逢いに行く。まるでドラマ仕立ての感がある。

草餅に添へ水天宮の守り札
母の日を母となりたる子に祝がる

「俳誌望見」の原稿を書きながら、お孫さんの生まれる喜びと、娘さんを気遣う気持を電話等で聞かされていた。安産の守り札を草餅に添えるなんていい母親やってるなあと思っていたら、無事に出産を終えた娘さんから母の日のお祝いを送られたと。おめでとう！そしてご苦労様でした。

季の風物

松宮保人

吉住光弥

葱一本の味を頼りに一人の餉
寒林を行き鬱屈の晴れし空
春時雨疼きも京の竹林の道

奥さんが他界されてから、現在一人身の暮しをされているのであろうか。毎朝の味噌汁に放り込む葱の香りに助けられながら活気のない日々を過ごしている心境が伝わってくる。

気が晴れないまま、ふさぎ込んでいてはと思い、外に出て冬枯れの林を散策していると、その先には気が晴れるような青空が広がっていた。

まだまだ心が痛むのであるが、作者が大好きな京都の「竹林の道」をゆっくり歩いているのである。

空堀に雑兵の碑や著莪あかり
踊の血制御効かざる手が脚が
大手門ぎいと夜を吐く秋の朝

まだ残っている平城で、中でも水のない堀に、名もなき兵士の墓碑がある。其処には薄紫の著莪の花が咲いている。

作者御自身であろう。踊りが上手な方がとお見受けする。踊りが本当に好きな人は、近くで踊りの音楽が流れてくるや否や、無意識のうちに体が動いてしまう。作者はそんな特技を持っておられる。羨ましい限りである。

俳句も然る事ながら、そんな特技を生かした意義ある余生を送って欲しい。

境　延昭

冬支度行方わからぬ備忘録
山茶花の散るや戦没慰霊の碑
魚河岸の糶の符丁よ息白し

私も同感である。忘れてはいけないと、メモ帳等に記録しておくことは良いのだが、そのメモ帳を何処かに置き忘れてしまうことが往往にしてある。

当地若狭の瓜割公園には、歴代の水明主宰の句碑が建立されており、地域を見守るかのように戦没者の霊を祀る英霊殿が名水瓜割の滝のすぐ側に鎮まっている。

冬の朝、魚市場では、寒さなんか吹き飛ばしてしまうような威勢のよい競りの声が「息白し」によって伝わって来る。

烏賊釣の船が海猫連れ帰る
天地や千年杉の岩清水

天地とは宇宙のことであるが、無限と言わざるを得ない。人間には到底測り知れないが、「自然」と解釈すれば偉大さが解るのではないか。岩の間から湧き出る清水によって、千年も生き永らえる杉の木も凄いが、自然の恵みがそれを助けているのである。

田寺玲子

パレットへ早春の色盛り上げて
紅椿百の落花に百の影

水彩画か油絵か。パレットに絵の具をしぼり出し、今まさに描こうとしている。対象は景色か静物かは分からないが、早春の色が現れてくるのであろう。想像と期待が益々膨らむ。紅椿が落花時であれば、数多くてもみな同色である。しかし落花の場所によって、上向き、下向き、傾め向きそして水の上等映す影は様々であり面白い。観察力がすばらしい。

短夜のねそびれて聴くノクターン
朝まだき荒涛を烈きヨットゆく
寄する波静かに返す月の浜

梅雨明けが待ち遠しくむし暑い夏の夜、ショパンのノクターンであろうか、この静かな夜の抒情的な曲を聞いていると心静かに眠れるのである。

大場順子

松にまで燃え移らむと山紅葉
平家谷にかかる眉月雪女
ほろ苦さかみしめ食ぶる土筆和

松の枝振りの濃緑に真赤に燃え盛る山の紅葉が、炎となって燃え移るかのようにとらえた作者の単刀直入の詠みが魅力的である。

ほろ苦いに決っている土筆和をかみしめながら旬の春を味わっている。飾らないですっきりした俳句である。

初夏の風藍職人の藍の衣
紫陽花や瑠璃の雨降る七曲り

藍染の職人さんの着衣にさわやかな初夏の風が吹く。そして紫陽花が咲く頃、瑠璃色の雨が幾重にも折れ曲っている街角に降っている。いづれの句も季語がよく調和している。

松井由紀子

寒禽の一羽づつ来る小さき庭
老梅の凜と季を告ぐ花一輪

冬に見かける鳥とはスズメ・ムクドリ・ツグミ等であるが、日を変え時を変えて一羽づつやって来るのだ。

梅の木は年輪を重ねる度に花芽を沢山つけ咲くのであるが、今年も早や、季節を忘れないで一輪咲いている。

新樹林息ととのへて歩み入る
イントロを躓いてゐる秋の蝉
山峡は母のふところ蕎麦の花

若葉が芽吹いて瑞瑞しい緑の林を遊歩しようとする今、我が胸のときめきを感じる。気を静めて、静めて！

鳴き始めがしどろもどろしている蝉の声、それは秋になって鳴く蝉ではなく、秋になっても鳴いている蝉の声であろう。実にユーモアのある俳句。

山本鬼之介　選

水明集

初紅葉リュックに付けし鈴二つ
安らぎし祖父母の訛り零余子飯
お手玉を教ふる嫗木守柿
ひとり居の日合の酒や十三夜
伝説の鏡ヶ池を龍田姫

さいたま　保坂翔太

復水（をちみづ）を飲ませてみたし枯尾花
枯尾花吾が面差しは母に似て
なみなみと煎茶汲みたる冬日和
妙義嶺の奇岩を彩る冬紅葉
冬紅葉うつる水面や舫ひ船

高崎　原田秀子

気まぐれに風が梳くなり実南天
底晒しならぶ閼伽桶冬に入る
初時雨瀞に棹さす下り舟
走り根を摩る木漏れ日冬めきぬ
花びらの隙間の余情石蕗の花

さいたま　曲淵徹雄

冬めくや唐人笛が遠くより
赤子診る老医の庭に石蕗咲けり
手相見の夜辻の灯冬めける
紅差せば祖母の面影七五三
けふよりは大和男の子ぞ七五三祝

染谷正信

冬紅葉紅のあるうちまた逢はむ
冬紅葉峡を彩り川を染む
煮凝にもの言ひたげな夫の箸
枯芒筋書なしの余生かな
寒椿真紅の影に誰を恋ふ

熊谷　神田治江

文化の日路上ライブのハウリング
生命線少し伸びたか冬はじめ
隠すもの無くて雑木の冬はじめ
山茶花の垣根越しなるディスタンス
新都心遠距離バスの冬帽子

さいたま　渋谷きいち

悲話ありし慈母観音よ冬日和
四人乗り自転車弾む冬日和
ジオラマのやうな吊橋山粧ふ
冬紅葉最後の色を尽くしけり
移ろひも庭師の矜恃冬紅葉

熊谷　越田栄子

北口出て風をまともに冬めきぬ
冬めきぬ駅構内の広告も
膝にのる猫の体温冬めける
すくつと伸び陽を掴まんと石蕗の花
百獣の王も小春の大欠伸

上尾　横山君夫

山茶花の散る音もなく箒音
心して此の路を行く紅葉谷
初冬の大樹の幹は輝けり
懐かしき本屋街にも冬の虫
初冬の水音冴える厨朝

さいたま　塩野久子

ロボットの掃除見てゐる文化の日
心電図胸の奥までそぞろ寒
丈揃ふ山茶花垣に陽の遊ぶ
老犬の影引く野道冬はじめ
トランプの占ひ続き湯ざめかな

川口　野田静香

水底の日輪揺らぐ末の秋
鰯雲地上では市民マラソン
力石やや重たげに冬の庭
小春日や番茶を啜る母の皺
振出しに戻してみたき古日記

さいたま　日髙道を

小春日やポストの口に手首まで
叢雲に父の面影神送り
小夜時雨幾たびも文読み返す
左ネジの振子時計や山眠る
番長の押忍のひと声雪しまき

青木鶴城

石段の今朝の落葉はまだ若し
終電の窓に張り付く落葉かな
目を細め吾子に紅ひく七五三
入り日さす座の静まりや冬安居
稲株の越後平野よ山眠る

梅澤輝翠

日の丸の赤褪せてをり文化の日
石蕗咲くや今年最初の静電気
そそくさと夕餉を済ませ二の酉へ
疫病を掻いて捨てたし大熊手
アトリエの裏手にひそと八手咲く

東京　石川理恵

小春日や谷中界隈足まかせ
銀杏散るオープンカフェのカプチーノ
八手の花が福を呼び込む裏鬼門
裏木戸の門太し花八手
田の神の戻りし山の眠りをり

さいたま　笹本啓子

紅葉散る棒持つ子らは飛びまはり
「二人で」と誓ひし山も眠りけり
白昼の花火のやうに花八手
朝まだき湖畔にさらす凍豆腐
小春日の色づく並木老夫婦

西幅公子

冬初め探す陽射しのベンチかな
冬初め空はうすずみ昼の月
山茶花の散りてまた咲く古道かな
フェルメール展瑠璃色あふれ文化の日
「青池」や心見透かす秋の水

新　暦文

枯園や切株一つ新しき
神主のそぞろ歩きや神の留守
南座の師走歌舞伎や三番叟
冬雲と筑波嶺さかひなかりけり
車庫入の終車消灯夜寒かな

加藤でん治

晩秋や南を目指す旅一座
熟れ石榴思ひ出詰まる句帳かな
晩秋や夕日の中へ散る子供
椋鳥の大群宙に街暗む
乗り過ごし夜寒の駅にただ一人

さいたま　反町　修

入口に番傘ひとつ小夜時雨
冬ぬくし餌を分け合ふ番鳥
仰ぎ見る高千穂の峰神の旅
赤い糸縺れぬやうに神の旅
振り向けば枯山水に夕時雨

村杉清吉

境内の落葉「猪の目」に象られ
落葉掻くみな高齢の修道女
名画めく光の中の冬紅葉
悠然と散る千年の大公孫樹
耳元を物言ひたげな冬の蝶

平塚　丸屋詠子

初しぐれアドレスを消しひと泣きす
命日を静かに告ぐる初時雨
芭蕉忌や地図たどる指産土へ
降つたなら味噌塗りませう朴落葉
斬られ役倒るるごとく朴落葉

吉川　杉浦理恵

夕間暮れ庭隅浮かす花八手
枇杷の花万歩目指せば知らぬ街
濃淡の重なり合うて山眠る
ありがたく小春の光纏ふなり
風のままにたゆたふ芒銀の海

さいたま　菅原真理

冬浅し淀川睨む絵筆かな
三婆の話がはづみ時雨止む
厨出で初冬の朝の深呼吸
母月忌偲ぶる襞に村時雨
時雨来て古刹の磴を洗ひをり

藤岡真知子

晴れし日に火伏せの札を留守詣
滑らかな石の表や冬の庭
仰ぎ見る銀杏大樹や神の留守
時雨来て揺らぐ煙に硫黄の香
帰り花富士くつきりと富士見坂

橋本京子

山眠る裾に先祖の墓抱き
十ばかり毬ばな開き花八手
カラフルな葉の吹き溜まり冬初め
むづかしさ知る兼題や初時雨
縁側で新聞読むや小六月

森下美智枝

苔むせし地蔵華やぐ石蕗の花
箒目を銀杏落葉の隠しをり
荒れ寺に残りし井戸や初時雨
佐保川の飛び石覗く返り花
妻籠宿遠屋根よりの時雨かな

伊予　向井章子

谷間の村の静けさ雁渡る
夕映に黒点点と雁渡る
かまきりの面して冬の老農夫
凩に真向ひて押す一輪車
進みゆく記憶のうすれ返り花

若狭　山﨑郁子

透き通る小川に沿うて実むらさき
本を閉ぢ紅葉見上ぐる老紳士
枯葉踏む鞍馬寺へとつづく径
黄昏の間道返り花白し
嵯峨しぐる竹の戦ぎの音を消し

さいたま　斎藤みよ

猫舌にちと熱き茶や冬紅葉
空青し富士山麓の枯芒
街路樹を剪り揃へるや冬始め
時雨るるや濡れそぼちたる羅漢殿
ぴつたりと進化の繊維冬ズボン

東京　鈴木和子

スーパーの訳あり柿のその訳は
独り居の旧家の柿が捨て置かれ
柿の朱や母の歳越え生かさるる
寒さ来たるも遅々と進まぬ冬支度
再診の女医の一こと冬日向

杉戸　佐々木史女

家建ててここが故郷花八ッ手
手びねりの皿でもてなす花八ッ手
野良猫に軒先貸して花八ッ手
山小屋の板打つ窓や山眠る
夕映えの秩父盆地や山眠る

さいたま　竹澤和子

梟や登り窯ある伊賀の里
ポインセチアたまには外でランチなど
外灯や冷たき雨の降り止まぬ
マスクして結界をひく少女かな
団らんにいつも蜜柑のありにけり

若狭　檜鼻ことは

冬天や一顧もされず道祖神
毛糸編む夫の好みの黄土色
着ぶくれて云ふこと利かぬ糸と針
日の温み残る切干貰ひけり
九十のバイエル挫折日短し

いすみ　平石睦子

運河ゆけば醤油の香り冬めける
陳皮仕上げ峡の八軒冬めきぬ
瓦斯灯の橋の煌き冬に入る
紅殻の格子に石蕗の花明かり
雄渾の卒寿の筆致石蕗の花

春日部　諏訪サヨ子

犬の尿さへも赦して草の花
道過る威風堂堂穴まどひ
身に入むや百獣の王十万円
桜紅葉なべて虫喰ひ江戸小紋
喪の報せポストに在りて秋惜しむ

さいたま　本橋稀香

渡し場へ続く坂道石蕗の花
出勤のヒールの音や冬めきぬ
冬めきぬ牧草ロール点点と
時雨るるや鉱山跡の異人館
籠り居や風除の木々騒めける

仲田利子

早じまふマンション工事冬隣
頬杖の肘の継ぎ当て冬めきて
初霜や遠き棚田の米届く
厨にも精進の日々高野豆腐
初冬や声に張りある米寿の師

越谷　阿部幸代

きらきらと櫂のしぶきや秋澄みて　草加　外村紀子
小春日や神社ではしやぐ晴着の子
寄り添へば水輪重なる葦辺の鴨
凩の織りたる風紋キリム柄
朝明けの鳥居の陰や冬めける

駅ノートに残る痕跡うそ寒し　川崎　鈴木玲子
おもむろに墨磨る音の夜寒かな
老優の科白じわりと帰り花
能面に秘めし煩悩返り花
冬空にまねき看板賑賑し

萩白し鳩ヶ谷日光御成道　さいたま　田中泰子
木枯や木々の揺れゐる九十九折
山茶花の咲きつこぼれつ湯の宿に
木枯や岩につまづく古戦場
乱れ萩くくられ暗渠の遊歩道

納骨の塔婆四本冬近し　野村美子
白檀の香り仄かに冬近し
朝寒や習ひ始めの琴の爪
声高き建築現場小春かな
初霜や庭の葉つぱの薄化粧

読経の流るる境内石蕗の花　若狭　岡本祥子
焼き付くやポインセチアの真の赤
落葉まふ城下町ゆく人力車
木枯やひねもす里を吹き通す
頑なに天衝く赤や冬の薔薇

誘ふや苔むす墓地の花八ツ手　さいたま　小川洋子
頂の木木に葉が失せ山眠る
知床や海上からの紅葉狩
小春日や野菜乾かし常備菜
小春日に列なす亀の甲羅干し

目が笑ひ目がものを言ふマスクかな　小浜　松島寛久
連山の出羽にマタギと熊祭り
祥月に命しづかに冬の蝶
日影伸ぶ羅漢と寝起き冬の蝶
星降るや熊とめのこのイヨマンテ

手締めして意気揚揚と大熊手　東京　柳父はる
酉の市お神酒ふるまひシャンシャンと
先づは息災コロナ禍の一の酉
石蕗の黄やだんまりきめて夕暮るる
石庭に静ささそひ石蕗の花

初冬の樹々は新芽を宿しをり
盛岡の城壁照らす初冬陽
初冬の夕雲七色自然の妙
しぐるるや森も野原も靄の中
初冬の里山に映ゆ残り柿

さいたま　山岸久美子

お神籤をそつと結びし帰り花
時雨るるや医王寺の屋根光りをり
ゴッホにも見せたき紅葉南禅寺
疎まれてなほも可憐な雪蛍
我に似て頑張つてゐる木守柿

川村　治

秋惜しむ一球一打魂を込め
神無月気長に生きる難しさ
神無月朝の山並輝けり
紅葉に万感迫る今日の日よ
冬の朝走る子供の後を追ふ

和歌山　南條きわゑ

暮早し夕餉の支度はやばやと
昼食のデザートゆるり暮早し
シャッターをはや下ろす音暮早し
煮凝の白き御飯に沈みゆく
煮凝や父に酒注ぐ母のゐて

さいたま　高原和子

山茶花の一枝を切り供花とせり
山茶花の道ふるさとの香りかな
山茶花の香り漂ふ小庭かな
初冬に負けず路傍の小花咲く
孟冬の夜空はダイヤ散りばめし

さいたま　篠﨑紀子

しぐるるや生家のポスト青く錆び
口角を上げて庭掃く初冬かな
ありたけの懐古に耽り夕時雨
ちぐはぐな相槌多し冬初め
首すぢに刺さる時雨と少し行く

川口　新井のり子

青空に映ゆる黄金と蕎麦の花
蕎麦の花休耕田を真白に
一心に落穂を拾ふ夫婦かな
刈りゆけば畔に名もなき草の花
遠山の頂白し稲架たたむ

さいたま　池田珪子

猪鍋奉行〆は昔の武勇伝
城の松衣装をつけて冬迎ふ
さう言へば母も柿好き柿供ふ
万華鏡一人遊びの長き夜
芒原竜のうねりや銀と金

和歌山　嶋田洋子

無住寺にかすかな明かり冬紅葉
果つるまで色を凝らすや冬紅葉
解体の始まる庭に冬紅葉
想ひ出のセーターに穴目が点に
編みかけのセーター日ごと形変へ

さいたま　松田朋子

北海の匂ひ弾くる焼柳葉魚
カルシウムとつぶやき妊婦柳葉魚食む
袴着の子は脇差を振りたがる
半袖が目を引く男子冬の風
ランナーの足音を背に落葉掻く

岡田宣子

枯園の水落つる音清らかに
枯園に明り一筋差し込みぬ
枯園の木々も静かに眠りけり
神の旅残る我が家の山の神
生き様を振り返りつつ歩く秋

千坂平通

小春日の吊り橋軋む梓川
老猫の体重測る小春かな
騒がしき小鳥の群に小春風
小春かな明神池は眠りゐる
庇まで薪積み上がり小六月

東京　山中いちい

旧道に野仏多し石蕗の花
富士塚の頂上に咲く石蕗の花
石蕗の花すぐ行き止る岬路
山眠り送電線の子守唄
ゲレンデは人工雪よ山眠る

東京　水落守伊

飯椀にちよつぴりの鰒冬浅し
質草と云ふものありき冬はじめ
街中のコンビニ閉店冬はじめ
かたづけものかたづかぬまま冬はじめ
初冬の浦和街道影を見る

さいたま　髙橋敏子

塀だけが残りし旧家花八ッ手
花八ッ手谷中に今も富士見坂
多事多端日は暮れかかり花八ッ手
色の無き蕎麦屋の庭や花八ッ手
八ッ手咲く幽かな光翅の音

町田　瀬戸雄二郎

屋根伝ひくるつと伊賀の落葉かな
落葉降る目抜き通りに古書の市
焚くこともならずに今朝も落葉掃く
落葉蹴り気晴らしの空高くあり
刀匠の甜酒供ふ鍛冶祭

さいたま　森　和子

老い鴉いまだゆづらぬ枯梢
行く秋や真珠光りの雲連れて
刈田越え鴉二三羽夕茜
留守宅の萩刈らねばと浅き夢
遠紅葉家売ることも人頼み

横浜　山岸弘子

口重き友の電話や夜半の秋
いつまでも意地張り通すきりぎりす
強まりし風に負けじと秋桜
慰めの言葉かけつつ秋扇
里山の景色変へゆく夕紅葉

さいたま　水野興二

仕舞はれしままの和服を金風に
菊日和母の江戸褄蔭干しす
菊膾母には白き割烹着
収穫の里芋今夜の一品に
気忙しき秋のひと日の仕舞風呂

蕨　細井良子

己が影の十尺に伸び冬隣
冬近し動かぬままの風見鶏
継がれゆく人の世の性霜夜かな
習ひ性春夏秋冬からすと喧嘩
初霜や葉先に泊まり魂となる

さいたま　飯田忠男

大音響のエレキギターや神の留守
病棟の玻璃越しに見る冬満月
神の留守子らは社で隠れん坊
厠への忍ぶ足音夜寒し
黒猫と二人きりでの夜寒かな

さいたま　鈴木藻好

繕ひの縫針光る夜寒かな
何気無く手はポケットや夜寒し
神の留守猫がのそりと境内に
神の留守氷川の森の子らの声
通り風絵馬擦る音や神の留守

武田重子

川石にひらと貼り付く冬紅葉
煮凝で琉球会席始まりぬ
冬紅葉客待つ車夫と人力車
砲台を残す公園冬紅葉
煮凝を先付にして山の宿

東京　飯室夏江

年の暮家計と料理母強し
饂飩打ち初茸狩の会得待つ
靴音を路地に引き摺る年の夜
榾の火に団欒の幸醸し浮き
今朝の冬なくて七癖結露拭く

小川　藤間友二

何気なく一言もらす狂ひ花
湯の町は灯りぼんやり小夜時雨
小挽町路地裏しとど夕時雨
時雨るるや熊野古道はつづら折
裏腹な思ひ消したき狂ひ花

さいたま　臼田みち

土手下に猿の腰掛十三夜
コロナにも負けず狭庭の名残り茄子
酔芙蓉生きてる証の実を付けり
釣り上げし鯊の針抜く指白し
爺ちやんの思ひ出いつぱい柿をもぐ

藤沢　小島喜代子

特養と決めたる友や冬帽子
デイサービス歩幅狭まり冬に入る
冬浅し換気にまざるガソリン臭
着ぶくれて体温計の逃げ回る
完食を見する媼や冬の粥

さいたま　和田仁八郎（隆一改め）

いそいそと夫の出番や大根おろし
冬紅葉持久走もそこそこに
大根の変幻自在ほろ苦き
神無月幾久しくと言はれ来て
コロナ禍に咳はばかるる電車中

山戸美子

煮凝と猪口に割り入る女将かな
煮凝や上機嫌なる父の猪口
ちやぶ台の煮こごり割烹着の背
三婆の話はづむや暮早し
杖の先にゆるる尻尾や暮早し

さいたま　山下ユリ子

冬の朝キュッと音する登山靴
下町のだしまき玉子冬ぬくし
冬暖か日ざしを追ひて鉢を置く
頭からガブリと食ふや焼柳葉魚
柳葉魚焼く晩酌タイムほろ苦し

木村るみ子

新築や書軸は南洲天高し
書棚から俳誌と漫画置炬燵
道行く人が皆褒めてゆく七五三
置き忘れし電話が鳴りぬ炬燵中
書き損じをまた広げ読む冬ぬくし

横浜　川島典虎

色づいて顔近づける冬桜
山下りしたたり落つる秋の水
嫁に来て屋号でよばれ冬桜
どんぐりをけとばし歩く山路かな
老犬とゆつくり進む霜の道

鬼石　加藤ナヲ子

なつかしや長き縁側夕端居
コロナ禍やひとりぼつちの夕端居
社の森秋立つ蝉のこゑ激し
今朝秋と思えば軽き手足かな
うれし誤解西瓜の中の真黄色

浄められたる空の蒼さよ姫林檎
味噌だれおでん八甲田山を恋人に
団栗の転がる坂道ルーレット
神の留守この世あの世を恐山
暮の秋車輛はふたつ北の果て

冬空の茜晩照鳥の群
日溜りに秋桜揺蕩ふ安らけし
枯葉散る狭庭静かにわれも老ゆ
秋陽差すアクリル越しに夫と会ふ
独り居に虫の音ふつと偲ぶ今

煮凝のぷるんと居座る一の膳
虫喰ひの冬紅葉にも空の青
冬紅葉ぶらり散歩の六義園
一万歩茶屋から愛づる冬紅葉
モザイクのやうな煮こごり客を待つ

栃木　佐々木典子

大阪　飯塚智恵子

東京　河原叔子

さいたま　緒方みき子

秋彼岸ビルが突き刺す茜空
子の寝息秋のしじまのおもちや箱
岸辺打つ小さき波の夜寒かな
太太と新蕎麦の紙格子戸に
妻逝きて返事なき日々夜寒かな

大人の歯生え冬林檎食むひびき
お漏らしのズボン乾かぬ神無月
更地にす作業分担初時雨
掘り起こす切株あまた初時雨
パワーショベルの均す庭土初時雨

主無き庭咲き盛る秋明菊
秋夕焼彼の世の父の声聞こゆ
鎌倉の晩秋の庭父母今も
賤が家を彩る桜紅葉かな
寄合は野沢菜漬に凍豆腐

インバネス明治生まれの粋な祖父
炊飯器スイッチ入れて二度寝寒
十三夜コーギー犬は眠りこけ
蟷螂の道の真中に雄を喰む
藤の実のパチンとはじけ逃げる猫

さいたま　湯浅　和

和歌山　葛城千世子

宮代　関谷多美子

鬼石　榊原聰子

小春日や蒼天仰ぐ団子虫
沼揺らす鴨の軍団アンダンテ
弁天を守る狛犬日向ぼこ
静かなる料亭に咲く冬桜
石蕗咲いていよいよ旅の遠ざかり

さいたま　綿貫ひさの

金の紐バレンタインの日に結ぶ
春の海マングローブを満たしけり
飴細工春のにほひて指の先
春の朝風と友なりペタル漕ぐ

所沢　関根千恵

残り葉をやさしくぬらす時雨かな
黒を着て時雨の午後にお見送り
時雨来て人まばらなり園の道
窓少し開けて初冬の風を知る

川口　田村福美

木の上の猫の曲芸冬ぬくし
木枯の一号の名はためくや
頭から骨まで食す柳葉魚かな
花八つ手サファイア婚の祝かな

さいたま　小駒さち子

髪を切り十年日記買ふ度胸
朝寒や足の爪切る父の背
冬あたたか微睡む猫の息を聴く
泣き顔の焼柳葉魚喰ふ夕べかな

さいたま　横山礼子

松の間の時代絵巻や菊にほふ
七五三鬼滅のグッズ売切れる
とりどりの市松模様七五三
死装束に手作りマスク付け足しぬ

和歌山　高橋満耶子

母の背や越えし山坂吾亦紅
吾亦紅オカリナの世を醸しけり
針仕事背にいつぱいの小春かな
涎掛け小春に赤き六地蔵

さいたま　福田育子

鞴祭り酔うて浮かれて大の字に
腕自慢火の打ち会の鞴祭り
落葉時圧力鍋の出番なり
老夫婦手をとり合うて落葉踏む

落合和枝

故郷のリンゴ久しや丸かじり
密やかに夕日の中の吾亦紅
筑波山紅く輝く小春かな
蟋蟀や声ほそぼそと散歩道

春日部　増田静司

じゃんけんぽんあひこが続く文化の日　大阪　遠藤人美

冬構「金のなる木」を総出して
遠まはりして色葉散る坂をゆく

八〇〇〇歩影と歩くや冬日和　さいたま　樋口元美

冬の精宿る木森は生きてゐる
柳葉魚焼く皿を並べて孤食かな

令和３年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

応募資格	季音同人を除く同人・誌友
応 募 句	未発表作品：15句(表題を付す) 水明集・句会報等「水明」誌及び外部に発表した作品は不可。
締　　切	令和３年２月末日（発行所必着）
応募方法	水明12月号に応募用紙添付

選考は、新珠賞推選委員による推選結果を参考に、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。

尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

新珠賞選考委員会委員（９名）

山本鬼之介　網野月を　大村節代
石山かつ子　石井喜恵　井口俊晴
保坂翔太　青木鶴城　日髙道を

新珠賞推選委員（５名）

宇田白鷺　大橋廸代　茂木和子
椎野美代子　波多野寿子

俳句 2月号予告

1月25日発売
予価（本体945円＋税）

特別作品 高橋睦郎・三村純也・井上弘美

大特集
〝うまさ〟は助詞で決まる
韻文のてにをは
▼韻文における助詞の効果
朝妻 力／野中亮介／上田日差子／鶴岡加苗／中本真人
▼助詞を省く……依田善朗
▼韻文のための文語……櫂 未知子
▼この一語で名句となった50句……黒岩徳将

追悼
黛 執
▼エッセイ…今瀬剛一・井上弘美
▼代表50句…奥名春江 選

日本の俳人100
山田貴世『山祇』特集
▼人と作品 ▼一句鑑賞

付録
季寄せを兼ねた俳句手帖 春

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」（https://bookwalker.jp/）など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA https://www.kadokawa.co.jp/

俳壇 2月号

1月14日発売
定価900円（税込）

巻頭エッセイ
井越芳子

八木 健 選 滑稽俳壇

第三十五回俳壇賞決定発表
〈選考座談会〉井上弘美・佐怒賀正美・鳥居真里子・星野高士

巻頭作品10句
浅井民子・宇多喜代子・榎本好宏
岡田日郎・川口 襄・小島 健
澤井洋子・小路智壽子

追悼企画 追悼・黛 執

四季巡詠33句［第Ⅱ期］……大島雄作・奥名春江

新連載
ものがたりのある俳句……堀本裕樹
いきもの歳時記……角谷昌子
俳句史を見直す……秋尾 敏

連載
続々・日本の樹木十二選……広渡敬雄
俳壇史エピソード……坂口昌弘
思想としての虚子……中村雅樹

俳句と随想12か月 菅野孝夫・柴田多鶴子

本阿弥書店 〒101-0064
東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03（3294）7068 振替00100-5-164430

作品評

山本鬼之介

お手玉を教ふる嫗木守柿　保坂翔太

昔の子供の伝統的な遊びと言えば、男は竹馬・独楽回し・面子・凧揚げ・拳玉など、女はお手玉・お弾き・折紙・綾取り・人形遊びと言ったところか。個々に見れば上手下手の差はあったものの、それなりに仲間になって遊んでいた。

現代の子供らにとってみれば、此れ等の昔の遊びは異次元的な存在であり、爺婆が得意になれる場でもある。昔取った杵柄で、年寄が技を披露すると、今の子供達が眼を丸くして注視する。本句の嫗もその一人で、往時を懐かしんでお手玉を作り、二つか三つを巧みに操っている。相手は曾孫の女児かも知れない。庭には、晩秋の空に赤く熟した木守柿が映えている。この女児もほどなく曽祖母の技を会得するだろう。

復水（をちみづ）を飲ませてみたし枯尾花　原田秀子

復水は変若水とも書き、若返りの水のことである。古今東西、不老不死は人間にとっての究極の願望なのかも知れないが、到底望む可くもなく、せめて若返りの妙薬でもと思う気持は捨て難い。陽を浴びて金や銀に輝いていた尾花も、冬を迎えて枯れ細り、哀れな姿を晒している。そんな枯芒に復水を与えたらと思う優しい心根である。

初時雨瀞に棹さす下り舟　曲淵徹雄

瀞というと、瀞八丁や長瀞を連想するが、どちらにしろ夏場や行楽の秋の華やかな観光シーズンが過ぎたひっそり感が伝わってくる俳句である。本格的な時雨ではなく、時折ぱらぱらっとくる初冬の雨で、独特の情緒が伝わってくる。ゆったりとした流れに乗って下りながら、時折棹をさす船頭の手慣れた所作が初時雨に即している。

冬めくや唐人笛が遠くより　染谷正信

現実離れした表現が独特の効果を出している。種を明かせば、唐人笛は屋台中華そば屋が客を呼ぶのに使うチャルメラのことであろうが、かつての中国の猥雑な雰囲気が伝わってくる。今では、屋台を曳いて商いをする中華そば屋の姿が見られなくなったし、子供の頃口にしたあの特有の味も遠くなってしまった。寒さがつのってきた冬の一夜、駅から家路を急ぐ作者の耳に届いたチャルメラは、果してこの世のもので

あったのか。

煮凝にもの言ひたげな夫の箸　神田治江

冬の寒気によって、ゼラチン質の多い魚の煮汁が魚ごと固まったものであるから、当然人によって好き嫌いがあるだろう。食卓に出された煮凝を素直に食べることなく、何か文句を言いたげに箸を動かしている夫である。夫婦の間の微妙な雰囲気を巧みに表現している。

文化の日路上ライブのハウリング　渋谷きいち

公園・駅・商業ビルのコンコースなどで出会うことのある路上ライブである。文化の日の某所で遭遇したこのライブは、演奏者の熱演を台無しにするかのように雑音がひどく、聴くに堪えない観客がその場を去って行く。天気になる確率が非常に高い文化の日をぶち壊すかのようなハウリングとの違和感が、逆に新鮮味のある俳句にしている。

冬紅葉最後の色を尽くしけり　越田栄子

平地の紅葉は、色づき始めた初紅葉から枯れて枝を離れるまで、日を追うごとに色を増し人の眼を愉しませる。十一月も過ぎて師走を迎え、『今年はこれでお終いですよ』と言っているかのように、散りゆく前のときめきの色を見せている紅葉である。

百獣の王も小春の大欠伸　横山君夫

ペットとして飼っている犬や猫の欠伸姿を見ることはあっても、猛獣しかも百獣の王たるライオンの欠伸は滅多に見られるものではない。アフリカのサバンナで苦労して獲物を追うこともなく、檻の中を適当に動いていれば、毎日飼育員が旨い餌を与えてくれる。腹が満ちてぽかぽかのお日様に当たっていれば、自然に欠伸が出てくる。喉の奥まで見えそうなライオンの欠伸を見て、動物園の観客も釣られて大欠伸。

心して此の路を行く紅葉谷　塩野久子

渓谷を見事に彩る紅葉を観に、荒れた山路を慎重に歩いて行く。「心して」に歩行者の緊張感が、「此の路を」に素晴らしい紅葉を早く観たいという期待感が読み取れる。

心電図胸の奥までそぞろ寒　野田静香

心電図の検査は、身にかかる負担が無く、至極楽なものであるが、心電計の波形に異常が現れていないかという心配がつきまとう。検査を受けている人の心理状態を「そぞろ寒」

の季語を使って上手く表現している。

小春日や番茶を啜る母の皺　日高道を

作者との普段の会話から察して、掲句の母は作者のご母堂と思う。ゆっくりと番茶の湯呑み茶碗を口に運ぶ母親の動作と深い口皺に、母の人生と今の安寧を見出だしているのであろう。

小春日やポストの口に手首まで　青木鶴城

季語から判断しても、一見長閑な情景と思えるが、下五の措辞によって尋常でないものを感じる。筆者の経験では、ポストに郵便物を差し入れても、スムーズに落下しないことがある。この句のように手首まで差し込むと、前に投函されたものが邪魔していることがある。この種のトラブルは、特に右側の大型郵便物の投函口に多い。要するに、いい加減なやり方で投函する輩がいるからだ。

石段の今朝の落葉はまだ若し　梅澤輝翠

木の葉は古い順に散ってゆくとは限らず、他の要因も加味されて散るのであろう。作者が落葉の中の一枚を見て、散るには惜しい若々しい葉であると思いやっているのである。俳人の心が見えてくる。

石蕗咲くや今年最初の静電気　石川理恵

合成繊維の衣服や金属製のドアノブなどに触れた時に感じる静電気作用である。石蕗の花が咲く初冬において今年初めてということから察して、さぞ驚いたことと思う。季語との取合せについて言及するつもりはないが、新鮮味のある俳句である。

田の神の戻りし山の眠りをり　笹本啓子

田の神は、田を守護する神であり、広義では農業の神である。田の神は山に在して田仕事が始まる頃に里に降り、稲の刈取りが終ってその年の役目が済むと山へお帰りになるという。農村行事として田の神が山へ帰るのを送る「田の神送り」という儀式がある。田の神が山に戻って、山も安堵して眠りにつくのであろう。コロナ騒動で心安まらぬ日々を癒してくれる俳句である。

「二人で」と誓ひし山も眠りけり　西幅公子

生前の友と二人で登ろうと約束していた山なのだと思う。その約束が実ることなく友が旅立ってしまった。その山を眺めていると、薄らぎかけていた悲しみがまた湧き上がってくる。山が友を抱いて眠りについた。

冬初め探す陽射しのベンチかな　　新　暦文

暦の上では秋たけなわの十一月であるが、俳句の上では初冬の月である。コート無しでもしのげるが、日陰に居るとひんやりする。公園のベンチも、日の当たる所は殆ど他人に占められている。日当りのベンチを探している様子が伝わってくる。

枯園や切株一つ新しき　　加藤でん治

日々の散歩コースにある公園であろうか。周回路の脇にある木が最近伐採されたようで、生々しい切株が陽に晒されている。寒々とした枯園の景色に加えての切株で、さらに寒さを呼び込む雰囲気ではあるが、作者の眼には、なぜか新鮮に映ったのだろう。

晩秋や南を目指す旅一座　　反町　修

歌と踊と芝居で観客を楽しませる大衆演劇。座長夫婦と息子や娘を中心に一座を組み、全国を旅公演する。九州を本拠とする一座が多いそうで、年末年始を故郷で過ごそうと、南へ南へと移動して行く。高空を雁の一団が渡って行く。

入口に番傘ひとつ小夜時雨　　村杉清吉

谷間の鄙びた温泉宿を思い浮かべる。時代劇でしか見られなくなった番傘が宿の玄関に立てかけてある。一本という数が気になる。別の番傘を差して出た客が居るのか、それとも一本しか無いのか。小夜時雨が答えのヒントになりそうだ。

降つたなら味噌塗りませう朴落葉　　杉浦理恵

桐の葉と同様に朴の葉も大きく、落葉を詠むにしても一般の葉と違った観点から捉えることが必要だろう。とは言え、掲出句には驚いた。魚や肉、茸などを味噌を塗った朴葉で包み、炭火でじっくり焼いた朴葉料理に直結させた旺盛な食欲に喝采を贈る。

枇杷の花万歩目指せば知らぬ街　　菅原真理

『今日は一万歩歩くぞ』と意気込み、何時もとは違うコースを設定して出発。途中枇杷の花の芳香を嗅ぎ、歩を進めると、これまでに訪れたことのない街に入り込んでいた。お伽の国に来たような不思議な気持になった。

カラフルな葉の吹き溜まり冬初め　　森下美智枝

数種類の落葉が風に吹き寄せられて、意図しない色模様を作ったのである。「冬初め」を季語にして、散った葉と風を結びつけて明るい雰囲気を作り出したことで成功した。

水琴窟

（水明集十二月号鑑賞）

池田雅夫

夕闇の東京タワーに秋の雷　野村美子

積乱雲による空中の放電現象の雷。秋には「稲妻」として稲と深く結びつけられてきた。東京タワーやスカイツリーなど高い塔には避雷針が設けられている。遠くに見える東京タワーの上空では夕闇を裂いて「秋の雷」が光を放っている。

突然の雨に崩れし踊の輪　高原和子

にぎやかに二重三重の輪になって、民謡など郷土色豊かに踊っている。老若男女が一緒に踊ることができる盆踊は貴重な文化である。突然の雨にあわてて物陰へ避難したのであろう。今年はコロナの影響で盆踊を中止した所が多かった。

口笛に呼応してくる虫の声　葛城千世子

蟋蟀や鈴虫など虫の音を聞くと、つい口笛でまねてみたくなる。が、似せるのが難しく、虫のほうでも「へたくそ」といっているかも知れない。「口笛に呼応して」とあるので、上手いのであろう。声帯模写の江戸家猫八の芸を思いだす。

広き田に農夫一人や鵤猛る　山下ユリ子

かつて盛んだった稲作りも後継者不足、農人の高齢化などで休耕田や放置田がそちこちで見られる。そんな世相とは関係なく鵤が猛ている。風刺の利いた一句に共感する。

人声のとぎれとぎれの花野道　水落守伊

起伏に富んだ丘陵地一帯に広がる花野。小高い丘から俯瞰しているのだろう。花野を貫く一本の道。そこを立ち止まっては話し込み、また少し進む。その話し声が風に乗って聞こえてくる。「人声のとぎれとぎれ」が花野の雄大さを表す。

日暮れ来て何処ともなくちちろ鳴く　河原叔子

蟋蟀は「ちちろ虫」、「つづれさせ」などとも呼ばれる。近くで鳴いているとその所在を確かめたくなり、つい目を向けてしまう。夕暮れどき、暗くてその姿をもはや確認できないでいるが、澄んだ鳴き声だけを堪能している。

大花野夕暮列車駆け抜くる　関谷多美子

高原地帯を横切る鉄道。特急列車であろうか。通勤列車ならば、家路を急かせるように駆け抜けてゆく。大花野をゆく列車の景は情緒的で郷愁をさそう。反面、「夕暮列車駆け抜くる」に日常のあわただしさを感じ取ることができる。

満月や絹の衣を纏ひけり　福田育子

満月に白く薄い雲がかかっている。それを「絹の衣」と表現している。高濱虚子の句に『はなやぎて月の面にかかる雲』がある。情景、心情に共通するものがある。「纏ひけり」を「纏ひける」の連体形にしてはいかがなものか。

新盆に「只今」の声空耳か　池田珪子

最愛の人を亡くし悲しみに打ちひしがれている。その淋しさを堪えながらも、やがて新盆を迎え御霊を祭っていると、どこからか「ただいま」の声が聞こえたような気がしたのだ。「空耳か」に、ようやく気持の整理がついた安堵感がある。

病む夫に合はせ鏡で見せる月　嶋田洋子

合わせ鏡は活用するが、このような心遣いは思いもよらない。病床から動けない夫に一目、名月を見せてやりたいと思いついたのだろう。同様に、日常の暮らしにも細やかな心遣いがされていると察することができる。衝撃的な句に感動。

秋夕焼家路を急ぐシルエット　遠西勢津子

台風が過ぎた後などに、ことさら赤く燃えるような雲が見られる。日暮が早い秋の空の夕焼けは一抹の淋しさを含み趣きがある。「シルエット」が明暗を際立たせている。

鴉ねぐらへ秋夕焼に吸ひこまれ　田村福美

同じような句が数句あったが、「鴉ねぐらへ」と、具体的に表わしている。茜色の空を黒い鴉が影絵のように次第に小さく消えてゆく。上五の字余りも許容のうちであろう。基本を重視するならば、「鴉二羽」としてもよいのではないか。

夫宛にメモとみそ添へ新生姜　飯室夏江

夫の知人から新生姜が届いた。それには新生姜の召しあがり方などの一文とみそが添えられていた。おそらく自家製のみそにちがいない。「これで一杯飲んでくれ」というのだろう。相伴にあずかり、夫婦で酌み交わす姿がみえる。

近況の報告長く秋扇　樋口元美

久しぶりに電話での親交をあたためているのだろうか。あのことも、このことも話したいことが次々に浮かび、話が尽きない。扇を使うほど暑くはないのだが、あまりにも長い話に間がもたず、手近な扇を手にしたのであろう。

尾根高く民話の里の盆の月　工藤信子

周りを小高い山に囲まれている里。そこは民話の里と呼ばれている。数々の言い伝えや習わしがあるにちがいない。その歴史が「盆の月」に象徴される。「尾根高き」でもよい。

大村節代 選

鼓笛集

火口湖のコバルトブルー雁渡し
青蜜柑小島へ向かふポンポン船
浜町の江戸紫や十三夜

保坂翔太

秋深し東茶屋街三味の音
大吉と浮き出るみくじ鞍馬秋
すり足の足袋の白さや能舞台

外村紀子

今宵こそあのおでん屋の縄のれん
熱燗をしみじみ舐める歳となり
ふかし藷ふる里のこと母の事

日髙道を

横柄な男三たびも大嘘
冬晴れや石の狸の腹なづる
銀杏落葉怖き羅漢に睨まるる

橋本京子

秩父の子頬被して学校へ
質種は形見の指輪一葉忌
木枯や背中丸めて屋台酒

染谷正信

さざんかや子の頬そめるケンケンパ
小六月背に陽を受く畑菜摘み
銀杏落葉ニンフの庭と思ひけり

西幅公子

大島紬コートに直し街闊歩
結び文の水茎の跡冬うらら
小谷村に座像の牛や冬ざるる

諏訪サヨ子

目が会へば走り来る児や秋の暮
立冬やウエイトレスを経験す
背中丸め話してゐる鴨二羽かな

南條きわゑ

説教は聞かぬ構への新松子
壺に盛れば寒菊一時華やげり
落葉舞ふ帰る場の無き子供達

瀬戸雄二郎

冬の雲闇夜のごとく覆ひたり
鉄瓶の煮えたぎる音秋の風
ひた走る只管走る秋の日や

杖をつき免許更新室の花
室の花認知検査も無事通過
第三波に見直すＧＯＴＯ室の花

冬隣ガラス窓ふく若夫婦
冬隣二百グラムの肉を食ぶ
要領の悪しき一日や風邪薬

冬の夜読み継がれたる絵本かな
冬山の入り日に見惚れ宿に着く
手入れ良き庭の金柑仄香る

和やかな陽差しお話し報恩講
「他力」説く僧の熱弁報恩講
コロナ禍に生とリモート報恩講

料亭の植栽灯す秋の月
爽やかかやカットのきまる美容院
落葉道ショーウインドーに赤い服

千坂平通

髙橋満耶子

高原和子

野村美子

関谷多美子

武田重子

冬の虹草木生えし津波跡
冬ぬくし大活字本傍らに
炉開きや亭主種火を作りをり

おもひびとバレンタインの日の小箱
胸で聞くてのひらのこゑ桜貝
波打ちを静かに洗ふ春の海

仲田利子

関根千恵

逞しやこんなところに返り花
冬晴れやビルの隙間に白き富士
赤き実や啄ばみこぼす冬の鳥

樋口元美

お知らせ

鼓笛集は水明集欄の同人の皆様の句の発表の場として、長年にわたって続いております。今までは、名簿順に編集部から、投句のご案内を致しておりました。

この度「鼓笛賞」が新設されました。今までのように名簿順では、いつも同じ方と誌面を飾ることになってしまいます。そこで四月号からは、投句者全員を無作為にご案内致すことになりました。投句ご案内の葉書が届きましたら、こぞってご投句されるようお願いします。

編集部

鼓笛集作品評

大村節代

青蜜柑小島へ向かふポンポン船　保坂翔太

ポンポン船の響きの楽しさ。良くぞポンポン船を詠まれたと思う。ポンポン船は蒸気船で、江戸時代から浦賀渡船や漁船等として、活躍していたと言う。この句のポンポン船は蜜柑を小島へ運んだのか、蜜柑を運び出すために小島を目指しているのだろうか。何れにしても、焼玉エンジンのポンポンという音と揺蕩う海の景が浮かび、わくわくする。

秋深し東茶屋街三味の音
大吉と浮き出るみくじ鞍馬秋　外村紀子

一句目は、深まる秋と三味の音によって、金沢の茶屋街の表面の華やかさだけではない景が伝わる。地名を詠むのは難しいのだが、次句の鞍馬の句と共に、さらりと詠まれ、心情が伝わる。

鼓笛集巻頭（一月号）

私の好きな一句（自句自解）　越田栄子

時の日や呼べば答へる猫とをり

息子が事故に遭った猫を拾って来て十五年。誰が呼んでも知らんぷりの猫ですが、決って私が呼ぶと返事をして私の足元でゴロン。子供達が独立して家を出た時も、いつも傍らで猫が癒してくれました。そんな掛替えのない猫との時間を句にしました。

熱燗をしみじみ舐める歳となり　日高道を

若い頃は、バーやカフェで気取って洋酒を飲んでいた。しかし、縄のれんで熱燗をゆっくり、しみじみと味わう年にいつの間にかなった。すると男の子は、三句目の「ふかし諸ふる里のこと母の事」の句のように、母の事を思い出すのであろう。作者の素直な想い、やさしい人柄に感心する。母上にとっても作者は自慢の息子なのであろう。

句集喝采

近藤徹平

◆川原　正「光年の星」

フランス堂

著者略歴　昭和二十年長野県上田市生。平成二十六年俳句結社「くぢら」入会、令和元年「くぢら賞」受賞。俳人協会会員。

中尾公彦「くぢら」主宰の序によれば、著者は保健体育担当の高校教師として勤続、退官後も大学後輩への助言を欠かさぬ律儀な元教師であり、同時に「くぢら」創刊会員として毎月定例の吟行報告記を執筆する等句会活動に熱心とのこと。

ゆく道はこの海霧（じり）深き先にあり
飄々として生きること知る竜の玉
光年の星と歩みしかたつむり
梅雨晴間生きるといふは歩むこと

何れも「生きる」を主題の句で、第一句は句集冒頭の句で迷いながら手探りでも前へ進む信条の句意。第二句は飄々としてを信条とする句意。第三句は句集の標題句で歩む速度の速さより生きる目標を見据えて歩む信条の句意。第四句は句集末尾の句で、「生きるとは歩むこと」と結論を示した句意。

寒の水細胞七兆覚醒す
細胞に熱く沁みたる根深汁
人体に骨四百本電が降る

著者の専門である保健体育の知識に基づく人体を詠んだ句。季語を巧みに取り合わせて成功。第二句集を期待したい。

◆明石志都江「白日傘」

玉梓発行所

著者略歴　昭和七年岡山県総社市生。平成十五年大阪府城東区老人センター俳句教室入会、同十八年「玉梓」入会。俳人協会会員。

名村早智子「玉梓」主宰は句集の序に「ご主人とともに歩んだ六十年のかけがえのない日々の記録」と記している。

初恋をしてゐた頃の白日傘
けんくわして眺むる朝の熱帯魚
夫の顔時々眺め梨を剥く
定年の夫とつれだち菖蒲園
桜咲き籠り居の夫誘ひ出す
微笑まし夫手作りの紙雛
ハワイまで旅の道連れ秋扇

序によれば、著者の夫君が大阪大空襲で焼出された際の疎開先が著者の近所であった縁、戦後夫君が岡山大学に進学した際著者も岡山市内で通学していた縁で、初恋が結実したという。第一句は句集の標題句でその縁を詠む。第二句は出勤前の夫君につまらぬ口答えをして落ち込んでいる妻の句。第三句は常に心を夫に注いでいる句。第四句、第五句は社会人生活を終えた夫君を新世界へ誘う句。第六句は介護施設に通う夫君を見守っている句。夫君は平成二十八年永眠された。第七句は著者が一人居を楽しむ句。米寿を迎え意気軒高。

水明の記事掲載他誌より転載

『俳句界』一月号
俳句界ニュース

「水明」創刊 90 周年記念全国大会

11 月９日（月）埼玉・ロイヤルパインズホテル浦和

「水明」（山本鬼之介主宰・写真中央）の創刊90周年記念全国大会が開催された。

大会では、山本主宰の挨拶のあと、創刊90周年記念の特別表彰として関係各所へ感謝状の贈呈があり、続く水明賞（結社賞）、季音賞、かな女賞、新珠賞の授賞式では受賞者に花束が手渡された。その後、俳句部門・エッセイ部門の特別作品表彰、新季音同人・新同人委嘱状の授与、大会に寄せられた祝電披露へと移った。大会句の表彰と講評も行われ、三本締めにて閉会となった。

○創刊 昭和5年　○主宰 山本鬼之介

長谷川かな女が現・さいたま市浦和区で創刊。有季定型で自己の個性を活かした俳句を詠む。

百年や寒濤切つて大漁旗　鬼之介

『俳句』 令和三年一月号

「水明」創刊90周年記念全国大会

「水明」創刊90周年記念全国大会が、令和2年11月9日（月）にさいたま市・ロイヤルパインズホテル浦和において開催された。当日は山本鬼之介主宰の挨拶の後、創刊90周年記念の特別表彰として、関係者へ感謝状が贈呈された。続いての結社賞等授賞式では、結社賞の水明賞、季音賞、かな女賞、新珠賞の各受賞者への表彰状と副賞の授与、記念撮影が行われた。また90周年記念特別作品（俳句部門および エッセイ部門）の表彰も行われ、記念大会にふさわしい充実の内容となった。

その後は、新季音同人および新同人委嘱状授与、祝電の披露、大会兼題句の披講と表彰、および講評が例年の全国大会の次第通りに進み、最後には恒例の主宰の拍子木による三本締めにて閉会となった。新型コロナ感染症対策のために祝賀会は時機を選んで開催される予定である。

山本主宰と受賞者各氏

記念の大漁旗の前に立つ山本鬼之介主宰

☆

『俳壇』 一月号

俳壇ニュースクリップ

▶山本鬼之介主宰。上五会より贈られた大漁旗の前で

「水明」創刊九十周年記念全国大会

十一月九日（月）、埼玉県のロイヤルパインズホテル浦和にて開催された。山本鬼之介主宰の挨拶に続き、九十周年記念の特別表彰、次いで水明賞等結社賞の授賞式、九十周年記念特別作品の表彰、新同人への委嘱状授与などが行われた。

☆

水明例会

第一例会（浦和）

茂木和子
境延昭報

手帳二冊てんてこ舞ひの十二月　和葉
木鋏の音澄みとほる十二月　由紀子
十二月まことしやかに占師　節代
色なくす里の野の花十二月　裕誌
紙切りの弁舌弾む師走寄席　マスミ

――以上特選

クリスマスせめて降らせむ紙吹雪　理恵
うす紙の風情で枯菊吹かれ立つ　治子
一語得て出づる図書館十二月　愛子
冬の日に水青さます和紙の里　大場順子
全校の「第九」合唱十二月　徹平
紙漉きの水の澄みたる和紙の里　裕誌
「くるるみ割人形」や十二月の夜　はるみ
疫病封じの護摩の火高し十二月　マスミ
新聞紙にくるみて寝かす八頭　稀香
捨てがたき包装紙捨つ十二月　チアキ
十二月ましらが走る繁華街　延昭
朝刊二紙ずずずずいと小六月　和葉
十二月終夜を灯すウィンドー　喜恵
奉書紙の嘆願掠る十二月　節代
霜の夜や紙子着て去る藤十郎　由紀子
小川和紙買うて冬夕焼の中　和子

第二例会（東京本所）

山中みどり
太田絹映報

クリスマス回転寿司の家族連れ　敏江
山茶花や笑みのこぼるる長電話　〃
山茶花の紅に潜むる暗きかな　峰雄
二ツ買ふ大福餅やクリスマス　竺仙
仕舞屋の路地は抜道花八手　玲子

――以上特選

クリスマス褪せた街にも到来す　いちい
掛布団首まで引きて星座呼ぶ　竺仙
山茶花が好きとパーキンソンの義姉　敏江
奥多摩湖浮橋渡る冬紅葉　玲子
平凡に生き霜月の誕生日　禮子
交番に大マグカップ姫椿　鶴城
山茶花の錆びて朽ちゆく路上かな　峰雄
星々は今宵饒舌のクリスマス　昌弘
樅となるスカイツリーやクリスマス　みどり
ホテルかと間違ふ院内聖樹の灯　絹映

第三例会（東京）

五明昇
曲淵徹雄報

湯豆腐や夫婦で交はす小半酒　康世
湯豆腐や兄なのはんなり京言葉　〃
湯豆腐や向き合ふ夫と別のひと　萬蝶
時雨るるや生くるに倦みて思案橋　〃
湯豆腐に起ちて踊れり花がつを　大場順子
カーテンを駆くる鳥影冬うらら　徹雄
アドバルーン短日の陽を引きおろし　祥絵
湯豆腐ぐらり核心を衝く裏話　昇
湯豆腐の湯気に紛らす密事　〃

――以上特選

湯豆腐のゆれて崩れて余生なほ　萬蝶
三年日記生願ひつつ買ひにけり　祥絵
湯豆腐で目覚めの一献宿の朝　理恵
湯豆腐や執へ所のなき夫と　喜久
湯豆腐のあくまで白き肌さらす　岡野順子

煤籠り初心者向けの詰将棋　雅夫
湯豆腐の匂ひはんなり京の夜　大場順子
棚上げにしたるてにをは燗熱く　徹雄
風伯の低き声聴くふぐと汁　康世
頬つ被り風に育む初一念　昇

第四例会（浦和）

境延昭
石井喜恵報

セーターの肩が涙を堪へてる　延昭
海鳴りが崖かけ登り冬苺　〃
脇道にまさかの出合ひ冬苺　光子
遥かなる初恋の味冬苺　修
思ひ出ぎつしり解れたるセーター　でん治
纏ひみる古セーターの歳月も　光弥
カフカ解く初老教授の赤セーター　マスミ
セーターは星占ひの今日の色　順子
——以上特選
冬苺に宝石の艶雨あがる　光弥
山野の香微かにまとふ冬苺　寛治
冬苺少女の顎の尖つて　恵子
碑に「石古しかや」と冬苺　マスミ
藪小道来て日溜りに冬苺　玲子
南洲の自刃の山の冬苺　延昭
セーターの背なまろやかに夫の老い　由紀子
セーターの子等鮮やかに二重跳び　昇
若妻は農学部卒冬苺　翔太
煽てられ赤いセーターベレー帽　暦文
リハビリの君の手を取る冬苺　でん治
捕まへて手編みのセーター子に被す　光子
セーター解くみるみる玉となる昭和　順子
セーターの首出すまでのもどかしさ　喜恵

若松例会（京橋）

石田慶子
正木萬蝶報

生きるとはマスクに隠す穴三つ　月を
マスクして目を逸らしてゐ二枚舌　〃
マスクまで黒に揃へて網タイツ　俊晴
暇乞ひせり口紅滲むマスク捨つ　佐江
見ゆるもの皆モノトーン冬の雲　鶴城
福耳に縁なき家系マスク買ふ　マスミ
冬薔薇やワインの澱と胸の燠　萬蝶
目と眉の人相書や皆マスク　理恵
——以上特選
待ちぼう犬何を待ちゐるクリスマス　月を
マスクしていよよ饒舌なる眼　萬蝶
釣り人の目玉喜ぶ白マスク　はるみ
マスクする未知の国へのパスポート　俊晴
マスクせる夫の物言ひ遠く聞く　千春
裏木戸に鬼門封じか冬苺　マスミ
改札へ迫るマスクの大集団　鶴城
とつておきちりめんマスクは逢瀬用　理恵
皆マスクのつぺらぼうの行き交ふや　佐江
マスク掛け川柳もどきの俳句詠む　倭子
マスクは外し思ひの丈を叫びたし　知子
白マスク昭和の路面電車過ぐ　ひろこ

第五例会（浦和）

梅澤佐江
河野はるみ報

火花散る大の一文字寺屏風　水尾
水差と屏風がさかひ夫婦仲　はるみ
枯園にナイトを気取る屋敷林　〃
屏風絵の逆立つ怒濤身に迫る　玲子
枕屏風旅寝にとどく波の音　〃
誠実と書きし屏風の折れて立つ　理恵
金屏を背に金婚の盃交はす　義子
枯園に金色の陽の最終章　佐江
——以上特選
金屏風の前で受賞の賑ははし　はるみ
枯園の池に迫り出す夫婦松　義子
日溜りのベンチで将棋冬の園　玲子
華やぎの季をたたみて枯園よ　水尾
絵屏風に見入る夜更けや京の宿　理恵
枯園や少女駈くれば少年も　紀子
枯園や荒縄で木木模様なす　美佐尾
風吹くや応挙竹林屏風より　佐江

各地句会

水明大阪俳句会（守口）

換気して埃と紛ふ冬蚊くる　ゆら女
落葉掃きも最終章に入り候　洋子
柊の花の愛しき齢かな　智恵子
こだはりの先の達観冬木立　人美
祝ぎの日の瑞兆大き冬の虹　敦子

光が丘俳句教室（東京）

着ぶくれの妻の指図の達者なり　守伊
手袋のまま立ち読みの週刊誌　はる
マフラー編む色とりどりの残り糸　康子
齢など不詳が宜し年忘　竜也
うつむいて何か言ひたげ冬帽子　理恵

蝌蚪の会（浦和）

湘南の大根畑空青し　るみ子
黄橙赤白にぎやかな冬至　元美
何時もより燥ぐ子の声冬至風呂　宣子
野沢菜も大根も洗ふ湧き水よ　さち子
投汁そば招きて囲む冬至かな　信一
味噌汁の大根甘し風の音　朝香
コルビュジェの屋根に冬至の月昇り　礼子
煮大根ナツメロ加へなほ美味し　ひさの
大根引く穴に今年の匂ひかな　鶴城
冬至る生暖かい目で見てね　月を

新樹の会（浦和）

客を呼ぶ声が近所に飾り売　京子
年の瀬や近くて遠き隣組　平通
マリア像眼差す先に都鳥　清吉
小火鎮火ため息ほつと壁は煤　でん治
遠火事やサイレンの音消え去りぬ　修
神の留守近江の杜の水時計　道を
火事跡の音のむなしき夜の雨　鶴城

山茶花（浦和）

通り過ぐ貨車の長さよ駅師走　泰子
風呂吹に二合半添へて二人の餉　マスミ
早朝の金星見えたる師走かな　清一
師走行く沖縄旅は基地重し　美江子
輪台を外し礼肥師走くる　光子
極月の名物市も細々と　しず子
落しもの戻る師走の軽井沢　綾子

和歌山水明句会（和歌山）

山眠り厨子にしづもる朱唇仏　和子
銀杏散る株価いつとき上昇す　道子
殉職の碑覆ふ照紅葉　千枝子
寒波来る講座の荷物まだ着かぬ　千世子
冬銀河地球に届く「玉手箱」　満耶子
柊の花俳人二人入る鬼籍　きわゑ
又しても鵯に先手の実千両　洋子
一念に冬かはせみの真一文字　廸代

櫟の会（浦和）

霜柱靴音サクッと朝散歩　裕之
三姉妹踊る舞台やポインセチア　克之
ポインセチア明るき妻はわが家の灯　朋子
換気タイム微風に揺るるポインセチア　富子
踏み踏めば里の音して霜柱　千重子
霜柱踏まれ砕かれ輝けり　彰二
宇宙より戻るカプセル霜柱　治子

皐月の会（浦和）

人混みを遠目に老いの年の市　紀子
蔦が枯れ窓現はるる館かな　静香
白菜を包む去年の新聞紙　久子
枯蔦や電子回路か家系図か　暦文
客待ちの煙草ぷかぷか年の市　きいち

鶴川山百合句会（鶴川）

塀だけが残りし旧家花八ッ手　雄二郎
火星人のきつとアンテナ花八手　月を
こめかみに湿けた煎餅雪ばんば　喜久
産声通る産院裏の花八ッ手　史代
花八ッ手赤子のグーはいつ開く　広子
運命線さがしてゐたり花八ッ手　知子
物置に小さきグローブ花八ッ手　由美子
つひに嫁ぐ内気な三女花八つ手　千春
金色を極めし銀杏落葉かな　萬蝶
南京錠かかりし木戸や花八手　理恵
親方の塩辛声や花八手　玲子

花衣の会（浦和）

朝日差す参道の黙冬木立　みよ
着ぶくれの並ぶ江戸城模型展　京子
闇汁に気になることを晴らしけり　峯雄
具の多きけんちん汁の田舎ぶり　治
雑用を済ます一日や根深汁　章嘉

りんどう俳句会（浦和）

人気なき広場の遊具虎落笛　弘夫
あるがまま生きて今あり焼芋食ぶ　寛治
刀傷残る本堂虎落笛　君夫
虎落笛ときをり軋む腰の骨　徹雄
野良犬が群がる宿場虎落笛　正信
生き様や笑顔絶やさぬ焼芋屋　翔太
焼芋の湯気も分け合ひティータイム　紀子
世もすがら虎落笛なる五重奏　卓郎
電飾の大樹磨けり虎落笛　治子
横丁の壺の焼芋江戸仕込　サヨ子
遠野物語神妙に聞く虎落笛　利子
焼芋食ぶ戦中戦後思ひつつ　典子
「焼芋日和」の幟を立てて焼芋屋　順子

きざきサークル（浦和）

人攫ひ在りし海辺や鰤起し　倶子
鰤起しマッチョな爺の腕が鳴る　喜代子
大空は海と一体鰤起し　かつ子
鰤起し大漁知らす長の声　啓子
指二本立てて冬眠五郎丸　和枝
朝まだき大砲のごと鰤起し　和子

たかんな俳句会（川口）

たつた一つの漁火消えて冬の海　真知子
目の前に嘘をつかせぬ冬の海　のり子
よく笑ふ女ばかりの堀炬燵　水尾
うつすらと離島の見ゆる冬の海　義子
今日は奔放島を取り巻く冬の海　福美
大漁や獲物を誇る冬の海　和子
風呂吹や教へてくれし友の逝く　律子
トランプの独り占ひ炬燵かな　勢津子
青函の冬の海ゆくヘリポート　久美子
しりとりの言葉に詰まる炬燵かな　静香
堀ごたつ鴨居の額入り家庭訓　鶴城

神戸大池句会（神戸）

冬紅葉映ゆる水面の波紋かな　早苗
唄仲間集ふも久しマスク越し　礼子
忙しなや又追ひ越され年の暮　千津子
冬帝の囃す絵硝子風さやぐ　玲子

青葉の会（浦和）

聖夜劇吾子は博士の黒衣装　美紗子
籠りても聖夜の窓はにぎにぎし　真理
ドイツ語で第九堂々クリスマス　美智枝
着替へして物の怪姫の年用意　美子
マッチ売りの少女の本やクリスマス　公子
聖歌隊ナースの揺らすペンライト　啓子
くり出して飲めぬ酒飲むクリスマス　洋子
はやぶさ2冬の星から届け物　和子
海辺にも山辺にも有るクリスマス　輝翠

野菊の会（与野）

折鶴と鉛筆ころがる冬机　和子
二代目のかかりつけ医やお茶の花　光子
のつぺりな顔の行き合ふ冬深し　まな
寡婦といふ文字更なる夜寒なる　美代子

りそな俳句会（浦和）

じよつぱりは母親ゆづりきりたんぽ　雅夫
きりたんぽ入荷したぞと県人会　久美子
きりたんぽ秋田訛に市民権　道を
帰り花五年日記に恋の詩　暦文
返り花今なほ残る旧街道　寛治
外苑に長靴の響き返り花　建治郎
きりたんぽ味をかみしめ母想ふ　京子
太き梁軋む曲屋きりたんぽ　マスミ

円卓の会（浦和）

樵林（おなりん）の新雪蹴つて行くうさぎ　翔太
冬の道弾む音あり玉霰　静香
風呂吹や連なる山は雪催　輝翠
若水や墨痕滲む祝箸　道を
時雨には五色の虹が檜木野山　月を
鍋囲むマスクマストの忘年会　鶴城

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

対で立つ石の裸像や冬薔薇　延昭
これ幸ひマスクの下の無精髭　俊晴
綿虫や喪中葉書が日に二通　正信
雪虫や音もたてずにりんごの木　淑子
冬薔薇咲かせ齢をまたひとつ　倶子
綿虫の舞ふ七寸の「ディスタンス」　千恵子
暮早し惣菜店の量り売り　美枝子
ゆくりなき余生の出逢ひ冬薔薇　昇

芽吹句会（浦和）

陽をさそひ松の根方に実千両　玲子
紅さすほどに啄まれゆく実千両　修
喪の友に電話でエール十二月　富子
冬芝と天との落差新病棟　ひろこ
大樹の影に過去今未来十二月　チアキ
三度目の波に自粛の十二月　千重子
落柿舎に芭蕉の記憶紅葉散る　道を

水明鬼石句会（鬼石）

集会所行き交ふ声や大掃除　和子
真夜半の咳こみひびく北病棟　聡子
裏庭の白南天の風強し　ナヲ子
飛行機雲何処に行くのか冬の空　洋子

野ばらの会（浦和）

縁側の母の膝掛け針坊主　栄子
間遠なるページ繰る音膝毛布　和子
宿坊の修行体験霙来る　夏江
輪島朝市三日続きの霙ふる　茂子
膝掛や心の余白埋めるなり　治江
揺り椅子の眠りを誘ふ膝毛布　秀子
膝掛けやパズルのピース隠れをり　みき子

雛の会（浦和）

熱弁の腰を折りたる咳ひとつ　喜恵
風呂吹の真白き肌に吸ひ込まれ　輝翠
テレビ電話咳に赤らむ友の顔　チアキ
風呂吹の工夫重ねし母の味　燈女
寂しさを吐き出すやうにしはぶけり　佐江

水明熊谷句会（熊谷）

日向ぼこデイサービスのバスを待つ　正行
旅情ひとしほ手の届くかに冬北斗　和子
天狼の青悠久の彼方より　秀子
日向ぼこみな息災に老いにけり　燈女
人包みひたすら優し日向ぼこ　治江
讃美歌のオルガンの音よ冬の星　栄子
急行の停まらぬホーム日向ぼこ　徹平
狼を捜す兜太よ冬銀河　茂子

水明小川句会（小川）

老後の夢託せしみかんたわわなり　千代子
落葉踏むチャチャチャのリズムついてくる　和子
道の駅楮干したり和紙の里　きよ子
寒あかねさよなら返す部活の娘　みや
一仕事終り見上げる冬夕焼　むら子
障子穴見て見ぬ振りの年の内　綾子
朝ぼらけ山端に白き冬の月　栄子

ミモザの会（横浜）

銃口の気配背に置く霜の夜　史代
冬紅葉妣の待ち針針山に　知子
湯豆腐や猫舌の夫眼鏡拭く　由美子
読み返す十年日記霜夜かな　亜弥子
山茶花やはらはら散らぬ恋心　栄子
焼芋あちちスキップのポニーテール　慶子
江戸切絵図に鬼平辿る霜夜かな　玲子
男湯にひびく亭主の大嘘　萬蝶
霜夜零時ぎこちなく鳴る鳩時計　千春

俳句の手ほどき（岩槻）

枯葎酒の仕業の武勇伝　延昭
熱燗や衒ふひとつの武勇伝　倭子
ひととせの想ひを胸に晦日蕎麦　佐江
大晦日富士の裾野を掃きにけり　ます美
飾られて見得きる役者年の暮　慶子
張扇が武者ぶるひする師走寄席　徹平
雲上に薄日の枯野奥武蔵　水尾
冬日和茶箪笥のみの武家屋敷　美佐尾
独り居のしみじみと聞く除夜の鐘　義子
大晦日鶏捌く考の顔　翔太
百八つを聞きつつ蕎麦屋蕎麦を喰ふ　忠男
大晦日どこか煙たき父が居て　幸代
恒例のトランプ遊び晦日蕎麦　美子
炉話に飽きて武甲の山遠見　卓郎
竹藪の笹のさやぎも年の夜　かつ子

あゆみの会（浦和）

冬霞ノッポのビルが宙に浮く　朋子
電飾の木々の整列十二月　圭子
冬霞後ろ姿が遠ざかる　重子
冬霞迷ひて来たる鳥一羽　山遊
クリスマス通りすがりの飾り窓　和
冬霞頂きだけの富士の山　藻好

芙蓉句会（浦和）

湯豆腐や小皿ふたりの夜の膳　正子
掻き込めの小さき幸せ熊手買ふ　道子
一滴の目薬しみる冬の夜　税子
冬の日の祭囃子や遠うねり　仁
小言聞く見上ぐる窓に冬銀河　美子

櫻蔭句会（浦和）

母と立つ厨に届く除夜の鐘　道子
冬木立こもれ日描く地上の絵　千恵
冬木立子供元気に探検隊　多美子
除夜の鐘秩父盆地に吸込まれ　茂子
華やかな時を秘めたる冬木立　美智枝
ふつくらと豆炊きあがり除夜の鐘　由紀子
冬木立夕暮空のモノクロ絵　真理
ぬくもりの頬に伝はる冬木立　公子
靴音が追ひかけて来る冬木立　幸代

若狭水明会（若狭）

冬山へ電柵の鍵固く閉ず　初花
冬山に雲の躍く風の音　和風
黒々と冬嶺立ちたり北斗星　白鷺
内向きの話題ばかりや山枯るる　冬至
炊飯の煙り一筋冬山家　保人
冬の山黙して広き父の胸　鼓
樟脳の匂ひも被る黒セーター　郁子
冬の山雲の去来と問答す　寛久
ほどほどにすまぬ晩酌冬の山　ことは
セーターの小さき傷の思ひ入れ　祥子
畳みたるセーターの肘ふくらみて　想子

かわせみ句会（浦和）

賑賑し裸電球お酉さま　順子
酉の市急ぐ事なく人の波　良枝
肩車カラコロカラと酉の市　のぶ子
酉の市マスクの中で手締めかな　保子
寄せ鍋の手抜きにみえぬ美味さかな　友子
熊手市聞けば四万五千円　治郎
手拍子のマニュキア紅し酉の市　功
寄せ鍋や味染むるまで箸待てず　紀子
父の背や担ぐ熊手とにらめつこ　せいじ
お多福に負けぬ笑顔や酉の市　育子

柿の木塾（浦和）

白障子開けて故山と差向ひ　昇
閉ざされた障子に猫め爪を立て　節代
桟太き障子に響く木魚の音　和葉
時雨けりなほも奥へと樵径　かつ子
時雨るるや屋根くろぐろと蔵の町　水尾
縁側の破れ障子に日の名残り　俊晴
神域の石兎耳垂る夕時雨　恵子
幼な児をかばふ腕や夕しぐれ　和子

珊瑚の会（浦和）

サプリ飲み聖夜の街に花を買ふ　和子
白布一枚纏ひてにはか聖夜劇　広子
城跡の礎埋もれ冬木立　和葉
山祇の祠小さし冬木立　かつ子
冬暮や鳥の休める冬木立　喜恵
皇宮衛士の直立不動冬木立　マスミ
海風にみな傾ける冬木立　水尾
ハチ公に西郷さんに聖夜の灯　昇
冬木立きらきら空の零れ落ち　恵子
ダンディに樅の刈られて聖夜かな　光子
電飾を避けて喪中のクリスマス　史代
冬木立ふいに気づいた獣の目　節代

桜林句会（大宮）

都鳥出船の波に流れゆく　知子
夕映えの杭に身を置く百合鷗　光子
秘めごとにふくらむ胸辺都鳥　光代
頬杖をつきて思案の漱石忌　美佐尾

水明忌のご案内

［日　時］　２月17日開催予定の水明忌は時節柄、延期します。
［会　場］　開催が決まりましたら改めて、ご案内致しますのでよろしくお願いします。
［参加費］　未定
［投　句］
［申　込］　事業部

水明松本句会（松本）

時雨るるやポトフの匂ふ曲り角　恒子
木蓮の冬芽ミンクで身を包む　陽子
クリスマスサンタはコロナと言ひ聞かせ　マリス
五平餅食べつつ眺む雪の山　玲子
友恋へば風に落葉の立ち上がる　寿子

※新春俳句大会（中止）

１月31日（日）開催予定の「新春俳句大会」は、新型コロナウイルスによる緊急事態宣言のため、急遽取り止めとなりました。多数の会員の皆様にお申し込み頂きましたが、ご了承下さい。

※水明忌（延期）

上記ご案内の水明忌もコロナにより、無期延期となりましたが、開催が出来ます場合は速やかにご案内致しますので、お待ち下さい。

山本鬼之介

通信添削指導のご案内

主宰　山本鬼之介

水明俳句会の通信添削指導は、私が前主宰に進言し、平成23年１月から始めた講座です。これまでに、延べ50名ほどの会員が参加されました。一頃は盛況を極め、これまでの受講生の中から、新珠賞・水明賞・季音賞の受賞者が併せて十余名出ています。

しかしながら、ここ数年来参加者が停滞しており、誠に残念でなりません。私が主宰に就任後、境延昭氏に引き継ぎ、そして、今年１月からは、三代目の講師・網野月を氏が指導に当たることになりました。

遠隔地におられる会員の皆様をはじめ、句会に所属されていない方、高齢で句会に出にくい方、更に更に俳句に磨きを掛けたい方などなど、こぞって当講座に参加されることを願っております。
下記の要領に沿って早速お申し込み下さい。

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。

主宰　山本鬼之介

［指導者］　網 野 月 を
［作　品］　７句［受講料］1,000円
［方　法］　①用紙自由　②住所・氏名・電話番号を明記
③84円切手を同封
④返信用封筒は 不要　⑤締切なしで随時受付
［送付先］　網 野 月 を
〒336-0025　さいたま市南区文蔵１-13-3-401
電話 048－862－5926

春の吟行会のご案内

日　　時　令和３年３月 29 日（月）
会　　場　本所地域プラザBIG SHIP　東京都墨田区本所１丁目13番４号
　　電話　03－6658－4601　FAX　03－6658－4613
受付開始　10 時
句会開始　13 時
投　　句　嘱目（当季）２句　締切　12 時
会　　費　2,000 円（お弁当・お茶を含む）
　　※コロナの時節柄懇親会は行いません。
申　　込　３月10日までに会費を添えて発行所総務部までお申込下さい。
吟行場所　○隅田川　○両国周辺　○安田庭園（無料）　○横網町公園（東京都慰霊堂）　○下町散策
　　春の隅田川の風情、そこに架かる名橋の趣き、各吟行地の桜をお楽しみ下さい。
　　尚、地図は受付の際お渡し致します。
アクセス　○ＪＲ御徒町北口下車→東京都バス（錦糸町行き）
　　本所１丁目下車→バス停より１分で会場
　　○都営浅草線・大江戸線「蔵前」駅より徒歩８分。
　　○東京メトロ「浅草」駅より 12 分
　　☆大勢の方のご参加をお待ちしております。

主担当「第２例会」　支援「事業部」

水明発展基金御礼（敬称略）

―令和二年十二月二十八日現在―

山本鬼恵子	2口	田中章嘉	5口
新　暦文	5口	原田想子	10口
加藤イツ子	10口	網野月を	100口
大塚茂子	10口	正木萬蝶	20口
篠崎紀子	3口	加藤でん治	3口
加藤むら子	10口	森千代子	10口
山岸弘子	5口	西幅公子	10口
菊池ひろこ	10口	波多野寿子	10口
笹本啓子	3口	菅原知子	2口
高原和子	3口	俳誌「鳥羽谷」	20口
吉住光弥	10口	高島寛治	5口
小駒さち子	5口	鈴木康世	10口
小島喜代子	5口	渋谷基一	3口

―合計287口

角川『俳句』別冊（カドカワムック）好評発売中 定価3000円（税込み）

俳句年鑑 2021年版

2019.10▸2020.9

口絵◉ 二〇二〇年 一〇〇句選……岸本尚毅 選
写真でたどる 二〇二〇年の俳壇

【巻頭提言】……井上弘美

年代別 二〇二〇年の収穫

諸家自選五句……約六二七名！

今年の句集ベスト15
今年の評論ベスト7
四協会の一年
各俳句賞のひとびと ほか

【合評鼎談 ―総集編―】山尾玉藻・三村純也・山口昭男
今年の秀句を振り返る
〈令和俳壇「心に残る秀句」発表！〉

◉全国結社・俳誌 一年の動向 都道府県別目次付き！

◉全国俳人住所録 約二〇〇名を一挙掲載！

KADOKAWA
発行：角川文化振興財団　発売：株式会社KADOKAWA
● お問い合わせ先（注文）TEL.0570-002-008（KADOKAWA購入窓口）

風　声

○**現代俳句**十二月号――「特集・永年会員記念作品」欄

ひとり酒みみず鳴くとは粋狂な　茂木和子

○**現代俳句**十二月号――「現代俳句の風」欄

着ぶくれて神輿大路の渦のなか　大塚茂子

晒さるる寒林にある力瘤　越田栄子

石蕗の花一家支へし母のこと　野平美紗子

冬の鳥ほしいままなる高嶺晴　丸山マスミ

子午線へ天涯割りて星流る　田寺玲子

○**栞**（松岡隆子主宰）十一月号――「結社誌管見」欄

室井千鶴子氏の筆による「水明」創刊九十周年記念号の紹介

「水明」は昭和五年長谷川かな女が創刊。以後四代の主宰を経て、平成三十年に**山本鬼之介**が第五代主宰を継承。**山本鬼之介**氏は昭和十三年東京都生まれ。水明の指針として「長谷川かな女への回帰」を提唱する。

主宰作品「祝」八句より

水神の在す狭霧の姥淵

明月や巫女舞の鈴杜に染む

九九を復誦する子励ます法師蝉

十万億土聞くだに遠し酔芙蓉　の四句を鑑賞

次に「水明創刊九十周年記念作品」の正賞と準賞を紹介

正賞・井口俊晴氏の「四季を守る」から

見沼田に春を告げむと鷺舞へり

穭田の緑の息吹き輪廻かな　近藤徹平

次に準賞の二作品より

盃を添水鳴るまで宙に置く　保坂翔太

すかんぽや山鳩の声研せり

さらにエッセイ部門で青木鶴城氏「無二」が準賞受賞。また「水明全国大会」入選句から「天」「地」「人」の三句を紹介

「天」遊印の石の手ざはり竜天に　由良ゆら女

「地」傘寿米寿卒寿白寿や春の風　正木萬蝶

「人」無住寺の蜂の巣いまや活火山　近藤徹平

本記念号は主宰と重鎮作家二名、常任運営幹事十一名による「記念エッセイ」や会員十九名による「かな女俳句の一句鑑賞」「かな女俳句の解説」など多彩な特集が組まれ、読み応えがある。又「水明年譜九十年のあゆみ」は創刊以降の年譜と各賞受賞者一覧を三十頁も掲載し、現在の会員にも水明の流れが容易に理解できる。九十年の歴史と偉大な先人達を身近に感じ、今後の励みになるに違いない。最後に山本主宰の「記念号刊行に際しての所感」を紹介し無期延期された「祝賀会」が晴れやかに開催されることを心から祈念する。と結ばれている。

○**櫟**（江崎紀和子主宰）十二月号――「現代俳句探訪」欄

年頃のかな女の写真秋の昼　**鬼之介**

○**くぢら**（中尾公彦主宰）十二月号――「受贈俳誌美術館」欄

袖濡らす夜露も粋に女坂　**鬼之介**

○**草笛**（太田土男代表）十二月号――「受贈誌一詠」欄
水神の在す狭霧の姥淵　**鬼之介**

○**新月**（松田碧霞代表）十二月号――「受贈俳誌紹介」欄
落ちさうで落ちぬ離宮の桐一葉　**鬼之介**

○**太陽**（柴田南海子主宰）十二月号――「一誌一耀」欄
平曲や雲に隠るる居待月　**鬼之介**

○**菜の花**（伊藤政美主宰）十二月号――「諸家近詠」欄
平曲や雲に隠るる居待月　**鬼之介**

○**鳩の子**（柴田多鶴子主宰）十二・一月号――「珠玉の一句」欄
戒名を付けてやりたき秋の蝉　**鬼之介**

○**卻**（山本一歩主宰）十二月号――「受贈誌の一句」欄
朝もやの尾瀬の白虹小屋泊り　**渋谷きいち**

誤植訂正

一月号に誤植がありました。お詫びして訂正いたします。

裏表紙　若松例会　誤　正木満蝶×
　　正　正木萬蝶○

七七頁　誤　水明鬼石句会　越田栄子
　　正　水明小川俳句に親しむ会　越田栄子

最近の名句集を探る　座談会

小池康生『奎星』　齋藤愼爾
橋本喜夫『潜伏期』　堀田季何
篠崎央子『火の貌』　津髙里永子
司会◎筑紫磐井

❊巻頭三句
柿本多映
村上鞆彦
松岡隆子
河村正浩
髙松守信
本田攝子

❊俳句と短歌の10作競詠
鶴岡加苗
佐佐木頼綱

❊その時、俳句手帳
江崎紀和子
小川晴子

❊今月の華
衣川次郎
環　順子

人と作品
髙橋健文『中今』

❊好評連載
南　伸坊　猫の俳句
筑紫磐井　俳壇観測
坂口昌弘　忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人　句の手触り、俳人の響き
大西　朋　俳句へのまなざし
神作研一　手のひらの江戸――古典籍を旅する
藤村公洋　俳句のつまみ
二ノ宮一雄　一望百里

俳句四季 Haiku Shiki
2021年2月号
1月20日発売
定価1000円（税込）
http://www.tokyoshiki.co.jp/　東京四季出版
〒189-0013　東村山市栄町2-22-28　☎042-399-2180

後記

いよいよ立春。しかし、春は名のみの言葉通りの寒い日々。その上、コロナの終息も見えず、いつになったら春風駘蕩となるのでしょうか。

思えば大昔から、細菌、ウイルスは、ペスト、サーズ、コレラ等々、次々と変化して、人類や動物に襲いかかります。私も幼い頃、お祭りや公園の屋台で、買い食いするのを固く禁じられていて不満でした。あれは親の世代が、コレラを恐れていたのだと、後で思いました。

ちなみに、コレラ（虎列刺）は夏の季語です。いま世界中を恐怖にさらしているコロナも、何時か季語になるのでしょうか。

今月の年末回顧を是非お読み下さい。水明同人四十名の句を、八名の方に、五人ずつ鑑賞して頂きました。誌面では各自の担当は二頁ですが、一人分を書くのに、昨年の水明誌一月号から十二月号まで繙いて鑑賞する、それを五人分という大変な作業なのです。八名の方、お疲れ様でした。ありがとうございました。

いよいよ新珠賞の応募締切が迫って来ました。二月末です。どうしようかとお悩みの方は、是非ご応募下さい。尚、応募用紙は「水明十二月号」に添付しましたが、書き損じたり、失くされた方は、遠慮なさらずに、事務局にご相談下さい。

間違えてはいけない日時を間違えてしまいました。一月号七一頁の「水明忌のご案内」の申込締切日二月十日のところを一月十日に間違えました。誠に申し訳ございませんでした。しかし、コロナによる緊急事態宣言により、残念ですが、一月の「新春俳句大会」は取り止め、「水明忌」は無期限に延期です。コロナに負けず元気に再会出来ますように。（節代）

今月のはてな？

滑子（なめこ） 15
山祇（やまつみ） 16
拈華微笑（ねんげみしょう・ネンゲミセウ） 34
梵唄（ぼんばい） 34
将又（はたまた） 40
笄（こうがい・カウガイ） 45
日合（ひあい・ヒアヒ）の酒 48
柳葉魚（ししゃも） 50
鞴（ふいご） 59

頁

水明発行所受付時間

曜日：（月・水・金）

時間：午後１時～午後５時

（火・木・土・日・祭日は休み）

（上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内にお願いします。）

水明

令和三年二月号
通巻一〇八五号
令和三年二月一日発行

発行人 山本鬼之介
〒330-0073 さいたま市浦和区元町一一七一八
電話 048-886-六〇〇三

発行所 水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一一〇一二
電話 048-822-四七四一

誌代 半年分 六、〇〇〇円
一年分 一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分 二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分 三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇-〇-一九二三九三

印刷所 中央美版

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

水明集

五月号　二月二十五日締切

都市又は府県名

氏　名（俳　号）

きりとりせん

きりとりせん

山紫集

五月号　二月二十五日締切

二月の兼題「猫の恋・恋猫可」

投句対象者　同人及び季音同人「花欄」「月欄」

氏名（俳号）

※最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

水明通信

きりとりせん

都市又は府県名	姓並びに俳名

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

送り先　〒三三〇-〇〇六四　さいたま市浦和区岸町四ー十ー二一　水明発行所

新誌友紹介　下記の方が入会を希望していますので、見本誌をお送りください

住所	〒　－		
氏名		電話番号	－　－

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

季音抄

山本鬼之介

縄文の欠片を繋ぐ冬の月　島津初花
枇杷の花時に弱音の独り言　鈴木康世
ジョンレノン座せし木の椅子月冴ゆる　田寺玲子
独り居や霜夜の耳を聡くせむ　永野史代
文弱の顔しらじらと冬の星　西山貴美子
さびさびとひびく琴唄冬障子　波多野寿子
参道を鳶の影行く初御空　鳥羽和風
奏づるは月の篁虎落笛　大場順子
幾度も重ね啼きせる冬の鵙　井上燈女
降り注ぐ星の言の葉クリスマスイヴ　小倉倭子
疫病封じの護摩の火高し十二月　丸山マスミ
枯菊や和紙の風情の威を正す　柚木治子
山姥と露見しさうな大嘘　松井由紀子
枯園にナイトを気取り屋敷林　河野はるみ
枯園に金色の陽の最終章　梅澤佐江
マスクまで黒に揃へて網タイツ　井口俊晴
国境も領海も無き冬銀河　大塚茂子
千両や庭の光陰軽からず　井上玲子

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道〈身辺トピック〉

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明〈随筆〉

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明抄

山本鬼之介

お手玉を教ふる嫗木守柿　保坂翔太
復水（みづ）を飲ませてみたし枯尾花　原田秀子
初時雨瀞に棹さす下り舟　曲淵徹雄
冬めくや唐人笛が遠くより　染谷正信
煮凝にもの言ひたげな夫の箸　神田治江
文化の日路上ライブのハウリング　渋谷きいち
冬紅葉最後の色を尽くしけり　越田栄子
百獣の王も小春の大欠伸　横山君夫
心して此の路を行く紅葉谷　塩野久子
心電図胸の奥までそぞろ寒　野田静香
小春日や番茶を啜る母の皺　日高道を
小春日やポストの口に手首まで　青木鶴城
石段の今朝の落葉はまだ若し　梅澤輝翠
石蕗咲くや今年最初の静電気　石川理恵
田の神の戻りし山の眠りをり　笹本啓子
「二人で」と誓ひし山も眠りけり　西幅公子
冬初め探す陽射しのベンチかな　新暦文
枯園や切株一つ新しき　加藤でん治

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン（パルコ10F）	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	太田絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン（パルコ10F）	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	石田慶子 正木萬蝶
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋廸代	森本早苗

（第九十四巻　第二号）　定価　一〇〇〇円